

2006 年度
キリスト教活動ハンドブック



明治学院大学宗教部

目次

2006年度キリスト教活動案内

新入生の皆さんへ	学長 大塩 武	1
明治学院大学のキリスト教精神	副学長 鶴殿 博喜	2
チャペルへのいざない	宗教部長 司馬 純詩	4
キリスト教活動案内		
1. 大学礼拝・特別礼拝		6
2. キリスト教週間		8
3. 読書会		8
4. Peace Café		9
5. オルガン講座		10
6. 学生宗教活動懇談会		11
7. ペンテコステの集い		12
8. チャペルコンサート		12
9. 明治学院大学音楽祭		12
10. ワークキャンプ (国内・国外)		13
11. スタディーツアー		14
12. クリスマスツリー点灯式・市民クリスマス・コンサート		15
13. クリスマス礼拝 (横浜)・キャンドルライトサービス・音楽礼拝		15
14. 宗教部・宗教センターの連絡先		16
正規授業科目 [明治学院科目] について		
1. オルガン実習	1・2	17
2. ワークキャンプ	A・B	18
宗教部の活動に参加して		
オルガン講座受講生感想文		19
フィリピンワークキャンプ参加者感想文		24
クリスマスツリー点灯式		31

チャペル奨励集

～「新学期を迎えて」イースター礼拝より			
青春の日々にこそ	久世 了		34
すべてのことに時がある	鵜殿 博喜		37
光の子として歩みなさいー幸せなら態度に示そうよ			
	木村 利人		39
～「命」より			
逆転足し算で生きる	深谷 美枝		42
～「秋、実りの季節です」より			
育つ種	司馬 純詩		44
～「ワークキャンプを通じて」より			
今を共に生きる	加藤 良典		47
～キリスト教週間「学院スピリッツ」より			
弱者と共に生きた賀川豊彦ー周縁からの発想ー	加山 久夫		50
～「秋、実りの季節です」より			
実りゆくためのパッション	濱田 辰雄		52
平和を愛する人となれ	大塩 光		54
～「旅立ちの時」より			
4年間の歩み	佐野 聖二		57
～「大学とキリスト教」より			
智の共同体	鍛冶 智也		59
～「学生クリスチャンウイーク」より			
一粒のチョコレート	坂口 緑		62
私が救われた訳			
	渡辺 彬彦		64
～「近隣牧師からのメッセージ」より			
人生に使命はあるのか	長津 榮		66
Who is Jesus			
	Christian Zebley		68
Just Say Yes			
	Mckim, Joseph T		72
聴く力			
	土屋 博嗣		75
存在意義			
	稲垣 光児		77
～「一年生に伝えたいこと・先輩からのメッセージ」より			
音楽と私とキリスト教	岩崎 春奈		80



新入生の皆さんへ

学長 大塩 武

明治学院大学の歴史は、開国直後の 1859(安政 6)年にアメリカ長老教会から派遣されてきた宣教師ヘボン(James Curtis Hepburn,1815-1911)が開設したヘボン塾に遡ることができます。

ヘボンの功績は明治学院大学に連なる教育機関の創設に留まるものではありません。海外の情報を早急に収集する必要に迫られていた開国直後の日本人にとって、ヘボンが編纂した日本で最初の本格的な和英・英和辞典である『和英語林集成』は、今の私たちには想像できないほどの意味を持っていました。また、欧米諸国が達成していた医療水準から大きく後れをとっていた日本において、ヘボンは医師として病気に悩んでいた日本人を助けました。ヘボンは日本社会に計り知れない貢献をしています。

新約聖書(マタイによる福音書7章12節)には、“Do for others what you want them to do for you.” (人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい)というイエスの倫理の根幹を成す教えがあります。日本人のために尽したヘボンの生涯を貫く信念“Do for Others”を、私たちの明治学院大学は、教育理念として掲げています。この教育理念は私たち学生そして教職員の進もうとする道を照らしてくれるはずです。

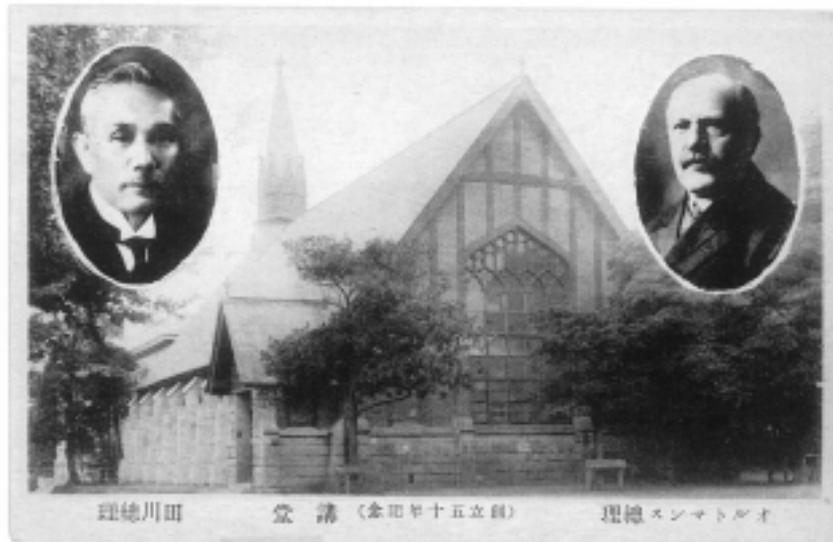
人間は誰でも人のために役立つことができます。皆さんが誕生したときご両親はどんなにか喜ばれたことでしょうか。皆さんの最初の“Do for Others”です。人間の幸せは突き詰めれば、自らの存在が人のために役立っていることを実感したときかもしれません。明治学院大学の教育理念をそれぞれの立場で実践していただければ幸いです。

明治学院大学のキリスト教精神

副学長 鵜殿 博喜

例外はあるでしょうが、私学は、一般的には、志のある人（たち）が教育の理想を抱いて建て上げた学校です。そのような数ある私学のなかで、明治学院大学は建学の精神をキリスト教にしています。キリスト教といただけでは漠然としていて、意味がよくわからないかもしれません。明治学院のキリスト教は、幕末にはるばる太平洋を渡って来日したヘボンとその他の宣教師たちのクリスチャンスピリットであるといっただけでよいでしょう。ヘボンが医療活動をしながらかり基督教を伝えたということは、21世紀のこんにちに生きる私たちにもいろいろなことを示唆してくれています。人間の魂の救済（信仰）と肉体の癒し（世俗の活動）は決して矛盾するものではなく、キリスト教は魂と肉体の両方を含んだ全人格的宗教だということを、ヘボンたちは教えてくれました。それはまたフロンティアスピリットでもあります。明治学院百数十年の歴史は、社会で活躍する多くの人びとを輩出したという意味で、フロンティアの歴史と言えます。

明治学院大学は、学生の皆さんにキリスト教の信仰を押しつけるようなことはいっさいいたしません。ただキリスト教とはどういう宗教なのか学んでほしいとは思っています。そこで、必修科目として「キリスト教の基礎」という科目を設けています。これは明治学院がその存在を証明するための中核的科目です。時代が進み、科学が進歩すれば宗教はなくなると思う人がいるとすれば、それはとんでもない誤解です。現代の世界を見れば、宗教がどんなに重要かわかりますし、宗教の理解なくして世界の人びととの相互理解はむずかしいということも、現代においてますます明らかになってきました。明治学院大学に入られたみなさんには、長い歴史と建学の精神から生まれた伸びやかでリベラルな雰囲気の中で、存分に学び、存分に活動して下さることを願っております。



1927年当時のチャペル
オルトマンズ氏は総理事務取扱いであった

チャペルへのいざない

宗教部長 司馬 純詩

中国語で明治学院大学というと「・・学校大学」といった、二重の響きを持つ名前になります。日本では似た名前は他にも・・塾大学や・・舎大学、・・社大学などがある。前身が規模や目的の異なる学校なのですね。中でも「学院」を冠する学校は、ミッションスクールである場合が多い。

明治学院大学へ、入学おめでとう。

入学式が賛美歌や聖書の言葉、お祈りなどで構成されているのは、明治学院大学がキリスト教主義の大学だからです。明治以前に、医療伝道のために後進の日本にやってきたJ・C・ヘボン等宣教師の学校の伝統にしたがって、入学式や卒業式などでは、キリスト教新教・プロテスタントの礼拝を取り入れています。

礼拝は一般的に次のような式次第に従います。

オルガン前奏	礼拝を前に心を落ち着かせ、集中します
* 賛美歌合唱	参加者全員で神を賛美する歌です
* 主の祈り斉唱	参加者全員で信仰の誓いを唱えます
聖書の言葉朗読	主題となる聖書の言葉が朗読されます
説教	牧師による説教もしくは信者による奨励
祈祷	説教・奨励者によるお祈り
* 賛美歌	参加者全員で神を賛美します
献金	神へのささげものです（志しが大切）
* 賛美歌（頌栄）	礼拝の終わりの喜びの賛美
* 祝祷	牧師による祝福のお祈り
オルガン後奏	気持ちを静める音楽です

*印は全員が起立して行います。

大学の式典では主の祈りが省かれたり、賛美歌の代わりに校歌や学生サークルグリークラブの合唱、牧師の代わりに学院長や学長の祝辞などが入れられ、献金が省かれ、最後はグリーのハレルヤコーラスなどで終わります。

教会の礼拝では時として聖餐式があります。洗礼を受けた信者が教えに従ってイエスの血と肉であるぶどう酒（グレープジュースが使われる）とちぎられたパンを口にする儀式です。教会によっては受洗者に限定せず、信じる心に任せるところもあります。

学期が始まると、昼休みに「チャペルアワー」として、簡略形の礼拝を設けています。世の雑事に惑わされることの多い毎日に、心鎮めて、精神を洗うような時を持つことは欠かせません。時には自分と向き合う必要もある。ノンクリスチアンの学生にキリスト教に親しんでもらうのもチャペルアワーの目的です。そのため時間も短くしてあり、献金などはなく、賛美歌と頌栄は一回ずつに減らしてあり、次のような順序になっています。

オルガン前奏	心を落ち着かせ、集中します
* 賛美歌合唱	参加者全員で神を賛美します
* 主の祈り斉唱	参加者全員で信仰の誓いを唱えます
聖書の言葉朗読	主題となる聖書の言葉が朗読されます
奨励	信者による奨励の言葉
祈祷	説教者・奨励者によるお祈り
* 賛美歌（頌栄）	参加者全員で神を賛美します
オルガン後奏	気持ちを静める音楽です

*印は全員が起立して行います。

初めての参加は、ちょっと勇気がいるでしょう。コツはさも常連のような顔をして、チャペルのベンチに座る事です。*印のときは、賛美歌集を握ってすっと立ってください。聖書朗読と奨励のときは、座って聖書を開いてください。礼拝が終わったら、気軽に周りの人と話をして、友達を作りましょう。みんな同じ仲間ですから。深閑としたチャペルのなかで、大きな大きな神様・創造主のもとにある小さな小さな自分を見つめてください。

チャペルアワーは横浜校舎では12時40分よりA館近くのチャペルで。白金校舎では12時35分（水曜日だけは17時30分）より記念館一階の小チャペルで行われます。白金大チャペルは改修中ですが、08年春に完成します。

キリスト教活動案内

【宗教部】

宗教部は、明治学院大学のキリスト教活動全般を担当している大学の組織です。白金校舎は、チャペルの向かいの記念館という建物の1階に、横浜校舎は、チャペル脇の建物の中に事務室があります。事務室にいらっしゃるのはいつでも歓迎いたします。

【宗教センター】

本学には学院全体のキリスト教活動にかかわる部門として、「明治学院宗教センター」が置かれています。中学校、白金高等学校、東村山高等学校、大学それぞれの宗教活動について連絡、協力する組織として1989年に発足しました。

【大学礼拝 チャペルアワー】

本学では授業のある毎日（但し土曜日を除く）、チャペルで礼拝（チャペルアワー）を行っています。オルガンの前奏を聴き、讃美歌を歌い、聖書に基づくメッセージがあります。メッセージは、本学の教職員、近隣の教会牧師、オルガニスト、学生など、さまざまな分野の方々が担当します。人生の根源的なテーマについて共に考えたり、今社会で起きている問題などを取り上げたりします。チャペルアワーは誰でも出席できます。広く皆さんの出席を歓迎します。聖書と讃美歌はチャペルに用意してあります。

【白金チャペル】 12:35～13:00（月・火・木・金）

【白金チャペル／夕拝】 17:30～18:00（水曜のみ）

【横浜チャペル】 12:40～13:00（月曜から金曜まで）

1967年11月創刊(1997年12月14日)

今週のテーマ: 旅立ちの時

発行所: 白金チャペル (白金5-1-1) 発行日: 12月20日

◆ 12月 20日号
 執筆者: 伊藤 実 (政治学専攻・教員)
 テーマ: 神の立てた足跡
 掲載頁: 6頁目、332頁
 題名: 神の立てた足跡 (新12月20日)

◆ 1月 6日号
 執筆者: 川原 和典 (政治学専攻4年生)
 テーマ: ながい聖書の旅立ち
 掲載頁: 527頁、316頁
 題名: マタイによる福音書 4章1節-22節 (新4年)

◆ 1月 13日号
 執筆者: Christian Zubky (協志会副会長)
 テーマ: God is With Us
 掲載頁: フロント「Queen They Long Expected Jesus」
 「Grown Men With Many Grown」
 題名: John 7:14 Matthew 5:18-20

◆ 1月 20日号
 執筆者: 大島 孝 (協力牧師・東海地区教会員)
 テーマ: 力を尽してよ、聖門、わたしこそ神
 掲載頁: 267頁、544頁
 題名: 詩篇138:1-2 (新2005年)

◆ 1月 27日号
 執筆者: 佐野 聖二 (文学部4年生・ハインツ奨励研究員)
 テーマ: 4年間の歩み
 掲載頁: フロント「5年4月5日、「首だから首なし」」
 題名: エッセイ「5年4月5日 (新12月20日号)」

◆ 12月20日号 伊藤 実 さん 学教監編輯
 ◆ 1月6日号 大島 孝 さん 協志会副会長編輯
 ◆ 1月13日号 伊藤 実 さん 学教監編輯
 ◆ 1月20日号 大島 孝 さん 学教監・協志会副会長編輯

2005年度のチャペルアワーは
 1月12日(木)を待って
 終了となります。

クリスマス献金にご協力いただき
 ありがとうございます

たくさんのあなたがいっぱい協力ありがとうございました。献金先、献金額については別途ご報告致します。

明治学院大学国際交流委員会 電話 No.03-5421-5218 Fax 5409

1967年に始まったチャペルアワー週刊誌「招き」は05年12月末-06年1月初週号で1000号を迎えました。

【特別礼拝】

特別礼拝は、イースターとクリスマスを祝して行われます。

イースターは、キリストの復活を覚える日として、キリスト教会では盛大に祝われています。本学では新入生の歓迎を兼ねたイースター特別礼拝を行います。

クリスマスは、明治学院のキリスト教活動では最大の行事で、多数の学生が出席しています。音楽系サークルも出演協力します。

新入生歓迎イースター特別礼拝

【白金チャペル】	4月12日(水)	17:30~18:00
【横浜チャペル】	4月13日(木)	12:40~13:30

クリスマス特別礼拝

【白金チャペル】	12月13日(水)	17:30~19:15
【横浜チャペル】	12月11日(月)	12:40~13:30
	12月15日(金)	17:00~18:30

【キリスト教週間】

特定の期間をキリスト教週間として、その週の統一テーマのもとで、礼拝ほか様々な企画（福祉事業、医療活動、教育事業、政治活動など社会の幅広い分野で働く方の講演や、話題作となった映画の上映会などを行っています。特に、横浜校舎のキリスト教週間最終日は《戸塚まつり》の大学企画イベントとしても参加しています。

2006年度のキリスト教週間は、横浜校舎が5月29日（月）～6月3日（土）、白金校舎は10月16日（月）～20日（金）の予定です。行事の詳細については白金通信や学内の掲示、週報、ホームページ等で確認してください。

【読書会】

読書会は誰でも自由に入ることができる講座です。授業のある期間に設定されていますので、時間の都合のつく方は参加してください。

聖書をよむ

講師：永野茂洋（教養教育センター教授）
日時：相談の上決定します。
場所：永野の研究室（横浜校舎1号館4階1417号室）
Mail：nagano@gen.meijigakuin.ac.jp

聖書と聖書以外の本を少しずつ読んで「こころ」と「脳ずい」と、ついでに少々「おなか」も満たそうという読書会です。

学生時代に聖書をゆっくり、考えながら読む機会を持つことは、他に代え難い貴重な経験であるように思います。この会が、参加者にとってそのような聖書とのよき出会いの時になればと思っています。

毎月1～2回程度のゆっくりしたペースで行います。参加資格は問いません。どなたでも気軽にご参加下さい。場所は横浜キャンパス1号館にある研究室で行います。

参加希望者は、日程を調整しますので、参加可能な時間割の空き時間を4月22日（土）までに上記のメールアドレスにご連絡ください。研究室に直接話を聞きに来てOKです。

〔聖書を読む会〕

講師：柴田 実（ホスピススピリチュアルカウンセラー）

日時：4月13日（木）スタート

毎週木曜日 18：00～19：00

場所：白金校舎 記念館 1F 集会室

キリスト教と初めて出会う学生を中心に共に聖書を読みます。

普段いろいろ感じたり考えたりしていること、悩んだりしていることなどを語り合う場所にしたいと思います。宗教、特にキリスト教、現代社会の問題、命の問題、自分の問題など、それぞれの意見を尊重して分かち合うことを目的とします。

なかでも特に、「生きる意味」について考えたいと思います。

関心のある方は、ぜひ参加して下さいね。

【Peace Café】

誰でも歓迎、出入り自由の、とっておきのカフェです。お菓子を食べながらゲームをしたり、文化や習慣などいろいろなことについて話し合ったりしています。日本語でも英語でも OK なので、英語がちょっと苦手という人も気軽に参加してください。逆に、英会話に挑戦したい人も大歓迎です。一人で参加してもすぐに打ち解けられるアットホームなプログラムです。試しに一度覗いてみて下さい。

Everyone is welcome to Peace Cafe! Enjoy gourmet coffee, tea and music in a relaxed, cross-cultural atmosphere. Come by yourself or bring your friends. Peace Cafe is a great place to study or meet new people. Japanese and English speakers of any level are welcome. Information on NGOs, Religious Office activities, Work camps, and Overseas Exchange programs is available. Come Hang Out at Peace Cafe!

担当：Christian Zebley（本学協力宣教師）
〈白金校舎〉：毎週火曜日 13時～17時
場 所：記念館1階集会室
〈横浜校舎〉：第2、第4木曜日 13時～14時
場 所：宗教部集会室（横浜チャペル脇の建物）
※ 白金校舎では4月11日から、横浜校舎では4月13日から開店。

【オルガン講座】

オルガン講座を受講した学生は、正規授業カリキュラムの「明治学院共通科目」である「オルガン実習1」「オルガン実習2」の各2単位を履修することが可能です。その際には、あらかじめ担当者の履修許可をもらって登録してください。〔17ページの「正規授業科目〔明治学院共通科目〕について」の「オルガン実習1・2」の説明を参照。〕

両校舎のチャペルにはパイプオルガンがあり、毎日の礼拝や行事で演奏されていますが、聞くばかりでなく、弾いてみてパイプオルガンのすべてを体験しよう、という講座です。横浜・白金校舎それぞれのオルガニストがレッスンを行っています。パイプオルガンへの興味は皆さままで、内側にもぐりこんで熱心に構造を調べる人、憧れのトッカータとフーガをめざして練習に励む人などいろいろです。キリスト教主義大学の特色あるプログラムのひとつとして、カリキュラムが組まれています。礼拝奏楽や発表会など、受講の成果を発表する機会も開催されています。また、横浜校舎では、リードオルガン、パイプオルガンと他の楽器とのアンサンブル、パイプオルガンの体験レッスンもあります。白金では記念館小チャペルにある小型パイプオルガンで講座を行います。

白金・横浜校舎それぞれ以下の方法で受講者を募ります。

オルガン講座2006年度受講生募集要領

原則として鍵盤楽器経験者を対象とし、オーディションと面接を行います。

〈横浜校舎の場合〉

・パイプオルガン

4月10日(月)までに、所定の申し込み用紙に記入し、宗教部事務室に提出してください。申し込み用紙は、宗教部事務室で4月5日(水)から配布します。

オーディションの日程は、4月11日(火)、12日(水)、13日(木)、14日(金)とし、希望日時は申し込み時に先着順で受け付けます。

課題曲は J.S. バッハ『インヴェンション』2声第1番ハ長調と任意の自由曲(長い曲の場合はその一部)を弾いて頂きます。課題曲の楽譜は、宗教部にも用意してあります。

オーディション結果の発表は4月17日(月)横浜宗教部までお越しください。

・リードオルガン・他楽器とのアンサンブル講座・パイプオルガン体験レッスン 随時受付をいたします。

〈白金校舎の場合〉

4月14日(金)までに、所定の申し込み用紙に記入のうえ、白金宗教部に提出して下さい。申し込み用紙は、4月5日(水)から白金宗教部にて配付いたします。

オーディションは、4月17日(月)、18日(火)、19日(水)のうち、いずれかの14:00~16:00のうち都合のよい時間に記念館小チャペルに直接おいでください。日時予約の必要はありません。

課題曲は2曲、讃美歌539番と J.S. バッハ『インヴェンション』2声第2番ハ短調です。楽譜は白金宗教部に用意しています。申込時にお受け取りください。

【学生宗教活動懇談会】

大学の宗教行事を積極的に支援している学生サークルがあります。新入生歓迎会、明治学院大学音楽祭、クリスマスツリー点灯式、クリスマス礼拝などの行事には宗教活動協力学生団体所属のサークルが出演し、イベントを盛り上げ

ています。2006年度現在の所属サークルは以下の通りです。

- | | |
|--------------|-----------------|
| ①グリークラブ | ②管弦楽団 |
| ③吹奏楽部 | ④白金ベルハーモニーリンガーズ |
| ⑤チャペルクワイア | ⑥クラシックギター研究会 |
| ⑦マンドリンクラブ | ⑧ヘボン聖書研究会 |
| ⑨国際クリスチャン同好会 | ⑩グリーン・リーヴズ |
| ⑪ゴスペルクワイア | ⑫人形劇団 ZOO |
| ⑬ハビタット MGU | ⑭白金ウオーク |

これらの学生団体のリーダーと宗教部とが1年に1～2度会合し、行事計画やサークル活動相談などを行っています。

【ペンテコステの集い】

ペンテコステとは、「教会の誕生日」という意味で、イースター、クリスマスにならぶキリスト教会の三大祝祭のひとつです。これは白金校舎周辺にある日本キリスト教団の諸教会と共催で行なわれる集いです。近隣教会と学院が良い協力関係で結ばれるよう30年余にわたって行われてきました。礼拝だけでなく、各教会の聖歌隊等による音楽の集いも行なわれます。学生のサークル等の参加も歓迎しますので、興味のある方はお問い合わせください。

今年は、6月4日（日）に行います。連絡は、白金宗教部事務室まで。

【チャペルコンサート】

宗教音楽というと堅苦しいイメージですが、音楽はもともと宗教と深い関わりがあるものでした。演奏曲目の文化・社会背景・作曲者の生涯についての説明など、演奏者のトークもまじえての楽しいコンサートで、このシリーズを楽しみに足を運んでくださる学外からのお客様もいます。演奏会の詳細は学内に掲示してお知らせします。

【明治学院大学音楽祭】

白金祭の一環行事として、毎年、音楽系サークルの大半が一堂に会して日

頃の成果を発表するのがこの音楽祭です。

チャペル改修工事中も、場所を移して音楽祭を継続するので、音楽サークルの皆さんには是非ご参加いただきたいと思います。

例年の参加サークルは、管弦楽団・吹奏楽部・グリークラブ・グリーンリーヴス・クラシックギター研究会・ゴスペルクワイア・バルハーモニーリンガーズ・マンドリンクラブ等です。

【ワークキャンプ】

国内・海外のワークキャンプを計画しています。

<アジア学院ワークキャンプ>

国内は、栃木県の西那須野にあるアジア学院にて、3泊4日の予定で行うプログラムです。アジア学院は、キリスト教を基にアジア・アフリカ諸国から農業、牧畜についての研修をするための留学生を受け入れている学校ですが、日本の学生たちの農業・畜産の体験学習も受け入れています。ワークは、家畜の世話や畑での作業が中心で、その他に施設の修理などもあります。日頃経験できないような作業ばかりですが、農作業初体験の方でも大丈夫です。

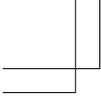
プログラム中は、こうしたワークの他に研修生（留学生）と一緒に農作業をしたり懇親会等交流の場が設けられます。またアジア学院のスタッフによる講演会も開かれます。これらは、普段あまり考えることのない食糧問題を真剣に考える良い機会となっています。働いて汗を流すことの気持ち良さ、空腹そして食事のありがたさなど、労働に限らないたくさんの経験が待っています。

2005年度、2006年度のワークキャンプは休止です。

<海外ワークキャンプ>

2004年度生以降の学生は、海外ワークキャンプに参加する場合は、正規授業カリキュラムの「明治学院科目」である「ワークキャンプA」「ワークキャンプB」の計4単位を履修することができます。〔18ページの「正規授業科目〔明治学院科目〕について」の「ワークキャンプA・B」の説明を参照。〕

今年度の海外ワークキャンプは、昨年度と同様にフィリピンで行う予定です。



キリスト教主義の国際NGOであるハビタット・フォー・ヒューマニティとの協力で、2週間で住宅建設とコミュニティサービスを行うプログラムを計画しています。一戸の家を完成させて、住人となる人に鍵を渡してキャンプを完了します。

4月から5月にかけて、ワークキャンプの説明会を白金・横浜両キャンパスで行います。その際に参加希望者の登録をし、6月から9月にかけて10回程度の事前研修会と2～3回の研修合宿を開催します。そこでは、現地での活動内容、安全や健康管理の方法、ハビタット・フォー・ヒューマニティについての知識、フィリピンの社会状況などの学習を含んだリーダーシップ研修を受けることになります。また、1つのワークキャンプグループとして役割分担も決め、準備を進め、現地に向かいます。

現地では、朝から夕方まで建設現場での作業が続き、夜や週末は見学や娯楽で楽しめます。最終日には、献堂式の後、さよならパーティで幕となります。また、建設作業とは別に、現地のNGO/NPOと協力して、コミュニティ支援のための活動に参加し、個別の研究プロジェクトをします。宿泊は、ホテルなどの宿泊施設で、ホームステイもあります。

帰国後は、報告書の作成と報告会を実施し、それまでに経験したことを深め、客観化させ、多くの人々と共有させる試みをします。

2005年度の参加費は、10日間で約15万円でした（交通費、宿泊費、食費、保険および建設費用を含む。）その他に、事前研修会の費用が2万円程度、予防接種の費用が2～3万円掛かっています。今年の海外ワークキャンプの日程は夏休みの期間に実施予定です。詳しくは白金宗教事務室に問い合わせてください。

【スタディーツアー】

平和を考えるスタディーツアーです。

ここ数年は8月下旬に沖縄県を訪ね、戦跡や文化遺産などを見てまわりました。あわせて沖縄に残されている手つかずの自然を満喫するプログラムも立てました。また8日間の旅のうち1日は自由行動として、少人数で自分達の関心に合わせて沖縄を楽しめます。

2006年度の実施・訪問先等は未定です。

【クリスマスツリー点灯式】

クリスマスを迎える約1ヶ月前、白金、横浜両校舎で電飾されたクリスマスツリーの点灯式が行われます。点灯式であかりが灯されたクリスマスツリーは、クリスマスまでの毎日、日没から夜11時まで、クリスマスシーズンのキャンパスを華やかに彩ります。横浜校舎の点灯式は、学生サークルが中心になって、学生主体の行事として盛大に行われます。また近隣の方々や保育園の子どもたちも参加しており、大学と地域の交流の場にもなっています。

【市民クリスマス】

横浜校舎のチャペルで行なわれる、地域住民を対象としたクリスマスの集いです。特に子ども向けのプログラムによって進められています。

【クリスマスコンサート】

クリスマスを祝したコンサートが両校舎で行われます。白金キャンパスでは、イギリス大使館クワイヤのチャリティコンサートが、恒例になっています。横浜チャペルでは、パイプオルガンとフルートの演奏を中心とした『風のうた』というコンサートが開かれています。

【クリスマス礼拝】（横浜校舎）

12月11日（月）はクリスマス特別礼拝として、通常のチャペルアワーの時間帯に時間を延長して行われます。2004、2005年度のクリスマス礼拝では、プロのゴスペルシンガーがゲスト出演し、素晴らしい歌声をチャペル内に響かせてくれました。

【クリスマス・キャンドルライトサービス】

白金チャペルの12月13日（水）と横浜チャペルの12月11日（月）に、クリスマス・キャンドルライトサービスをしています。ろうそくの火だけが灯されたチャペルで、音楽と瞑想とメッセージの静かな礼拝が行われます。

【クリスマス音楽礼拝】（白金校舎）

毎年12月23日に、明治学院の卒業生・在校生・教職員が集まって厳かにクリスマスを祝う音楽礼拝が白金キャンパスで行われます。

クリスマスの名曲はたくさんありますが、その中でもキリストの誕生物語を音楽にしたバロックの宗教音楽を中心に、音楽をちりばめたこの音楽礼拝は、巷のクリスマスとは違う心安らかなひとときを与えてくれます。

ご家族の参加も歓迎です。

【宗教部・宗教センターの連絡先】

宗教部ではホームページを公開しています。毎日のチャペルアワーの情報をはじめ、主催プログラム・行事の案内や学生の感想などを中心に構成しています。

<http://www.meijigakuin.ac.jp/creed/>

白金事務室 白金校舎 記念館1階
〒108-8636 港区白金台1-2-37
電話 03-5421-5218
FAX 03-5421-5459
電子メール shukyos@mguad.meijigakuin.ac.jp

学院牧師 白金校舎インプリー館2階 電話03-5421-5228
オルガニスト 白金校舎 記念館1階 電話03-5421-5227
(音楽主任)

横浜事務室 横浜校舎 チャペル脇建物1階
〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518
電話 045-863-2016
FAX 045-863-2017
電子メール shukyoy@mguad.meijigakuin.ac.jp

正規授業科目〔明治学院共通科目〕について

2004年度生以降の学生は、明治学院共通科目である「オルガン実習1」「オルガン実習2」「ワークキャンプA」「ワークキャンプB」（各2単位）を卒業単位科目として履修することができます。以下は、講座の概要です。

オルガン実習1・2（春学期・秋学期）

テーマ：パイプオルガンの歴史と実習

【講義のねらい】 パイプオルガンの演奏を習得する。並びにヨーロッパの音楽史・社会背景・他の学問との関連（修辞学・美術・言語等）も併せて学び、オルガン文化全般を理解する。

【講義内容】 チャペルのパイプオルガンを使用し、個人レッスン形式（各人のレッスン日時は講師との相談で決められる）で行い、個人練習時間も別に与えられる。オルガンの成立と歴史、楽器の構造、バロック時代までの様式（楽器・楽曲共に）の3点に重点を置き、随時講義も行う。また、学外のオルガン見学・試奏（ホール、他大学等）も随時行う。バロック時代までの様式と音楽語法を理解し、実践の努力をする。

【教科書・参考書等】 “A guide to duo and trio” (J.v.Oortmerssen 著), “Organ Technique” (S.Soderlund 著), 「古楽とは何か」 (N.アーノンクール著) から抜粋しテキストとする。その他に随時バロック作品の楽譜を紹介し、レッスンで使用する。

【成績評価の方法】 平常点40点、実技試験60点（レポートを含む）。

【その他】 担当教員の履修許可が必要。宗教部主催「オルガン講座」（任意。受講にあたってオーディションあり）を受講していることが望ましい。詳細は宗教部事務室に問い合わせの事。

ワークキャンプA・B

「ワークキャンプA」「ワークキャンプB」は、同時履修すること。4単位はセットで認定される。

【講義のねらい】 主に住宅建設を行う海外でのワークキャンプの経験および事前・事後の研修・学習を通じて、第三世界における社会・政治・経済の諸問題、都市および農村部の住宅問題、南北問題、開発と教育に関わる諸問題、NGO／NPOの活動とボランティア、リーダーシップ、異文化コミュニケーションなどについて、多様な視点から学ぶ。

【講義の内容】 4月の説明会の後、6月から9月にかけて10回程度の事前研修会と2～3回の研修合宿、9月中旬に2週間の海外のワークキャンプを実施し、帰国後、報告書を作成し、課題に基づいて学んだことを報告会で報告し、講座を終了する。

ワークキャンプは、現地のNGO（ハビタット・フォー・ヒューマニティ）と協力し、主に住宅の建設作業が中心の活動を行うが、「開発と貧困」に関わる他のNGOの活動に参加し、経験を深める機会も与えられる。

実習費用は、ワークキャンプ参加費が15万円程度で、その他、事前研修の合宿等に2万円程度を徴収予定。参加募集定員は15～25名程度。宗教部担当教員が引率・指導を行う。

【教科書・参考書等】 必要であれば、事前研修の際に紹介予定。

【成績評価の方法】 事前研修、現地でのワークキャンプ活動、事後の報告を通じて、評価する。

【その他】 履修希望者は、4月の説明会には必ず出席すること。説明会にて履修の方法、ワークキャンプの日程および参加費用等の詳細を説明する。説明会については、宗教部からの掲示を注意してみることに。

～オルガン講座～

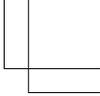
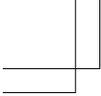
オルガンの音色から学ぶもの

加納 咲子

パイプオルガンという楽器に、わたしはずいぶん前からあこがれを抱いていた。趣味で続けていたピアノでJ. S. バッハの曲をたくさん弾いてきた、というところにあると思う。バッハは中世ヨーロッパの時代に活躍した作曲家だ。彼の生きていた時代、宗教と政治はかなりつよい結びつきを持っていた。人々は熱心に教会に通い、神に対して祈りをささげていた。その際に演奏されていたのがバッハの音楽である。つまり、音楽は神さまに非常に近いところに存在するものだった。そういった背景から、バッハの音楽には宗教色がかなり色濃く反映されている。なので、不思議とバッハの曲に触れているときは、なぜだか姿勢を正したくなり、おごそかで落ち着いた気持ちになる。それは彼の音楽が単なるBGMのような心地よい音の羅列ではなく、一つ一つの音やハーモニーに、神に対する祈りの気持ちや人々の願いが込められていることが、音を通して伝わってくるからなのではないだろうか。そんな神聖な雰囲気を持つバッハの音楽が、今でもとても好きなのである。

ピアノという楽器は、バッハが亡くなってからずいぶん後に発明された楽器である。つまり、彼の音楽は本来ピアノではなく、オルガンやチェンバロなどによって演奏されるために作られたものである。・・・そんな話をピアノの先生に聞いてから、いつかパイプオルガンでバッハの曲を弾いてみたい、彼が本来意図とした音で演奏をしてみたい！！と思うようになった。そしてその夢は、大学2年生の時にオルガン講座という場でついに叶ったのだ。

2段の鍵盤と足のペダルを通し、大小様々のパイプに空気が送り込まれる。すると、ピアノでは絶対に出せないような大きな音、何種類もの音色がチャペルいっぱい響き渡る。まるで、オーケストラが合奏しているかのようなスケール感を、オルガンという楽器ではたった一人の演奏で作り出すことが出来るのだ。これは、すごい。オルガンをはじめて間もない頃は、ストップを目一杯にあけて大きな音を出すことにちょっと怖じ気づいて、ある程度小さい音で練



習してから、徐々に音を足していった曲を仕上げている。右手・左手・そして足鍵盤と、頭の中を3分割して譜読みをするのもずいぶん時間がかかった。しかし最近、やっと最初から大きな音をがんに鳴らせて練習する事が出来るようになり、それが心地よく、楽しいものに思えるようになってきた。足鍵盤も、ちらちら見ないでも弾くことがかろうじて出来るようになってきた。重なり合う和音の響きを楽しんで、その美しさに意識を向けることも出来るようになってきた。

ピアノは音の強弱をオルガンよりもっとゆたかに表現できる楽器である。あるいは演奏者のテクニック次第では音の強弱のみならず、音色そのものにも限りなく変化をつけることが可能だ。一方オルガンは、一つ一つの音に強弱の違いをつけること自体難しい。大きい音を出そうといくら指に力を込めても、逆に小さい音を出そうとそっと鍵盤をふれても、同じだけの音量の音が出てしまう。これは、オルガンという楽器が根本的に管楽器であるという事実から生まれる、致し方ない性質なのである。実際オルガンでどのようにして、音楽により深みを与え、仕上げの作業を進めていくのだろうか。それは「意識」する事が重要であるらしい。演奏者は、一番目立って欲しいと思う音、もしくは主旋律のメロディを把握し、「（この音）がいま、重要な音なのだ！」と、しっかり意識をする。そのような意識をしっかりと持つことによって、不思議とそのメロディは際立ち、音楽はよりいっそう彩られてゆく。どうしてかと聞かれてもこれは説明に困るところなのだが、それがオルガンのおもしろいところなのである。この、原始的な楽器から、いかに人間味のある音を出せるか、という点はきつとこの先も課題であり続けるところであると思う。

時間をかけて練習した曲が、上手に弾けるようになるととてもうれしい。お稽古が進んで、自分の弾ける曲が増えていくのは、もっと楽しいことだ。やっと最近、自分の時間が前よりもてるようになり、オルガンに向かう時間も増えてきたが、この3月で講座が終わってしまうことは非常に残念だ。今思えば、オルガン講座では、もちろんオルガンを演奏するという貴重な体験をさせてもらったのはもちろんのこと、その他にも山本先生との出会い、2度の発表会、そして礼拝での演奏の機会など、たくさんを経験させてもらった。すべて大学生生活の大切な思い出となった。

何事にも挑戦し、最後まであきらめずに続ける事が出来るのなら、大学という場は無限の可能性を与えてくれる環境となりうる。オルガン講座だけではなく、4年間部活動をやめずに続けることができたし、1年から目標だった教員免許状取得も、成し遂げることが出来た。

4月からは社会人になる。学生生活とは全く違った生活が待っているのかと思うと、ちょっと憂鬱になってしまいそうだが、オルガン講座を含め4年間学んだ多くのことを糧とし、常に“チャレンジする心”を忘れずに過ごしてゆきたいと思う。

心理学科4年



横浜校舎チャペルのオルガン オランダ・フレントロップ社製
(1987年建造)

オルガン講座を受講して

樋山 美穂

私は入学当初から4年間、白金チャペルでオルガン講座を受講させていただいた。

日々の練習やレッスンを重ねて、これまで数回礼拝でのオルガン奏楽をさせていただく機会にも恵まれた。それらの経験を通して、私なりに考えたこと、感じたことを書いてみたい。

これまでオルガン講座を受講してから週に約2回、歴史あるチャペルに身を置いてきた。この経験は肌で文化を感じるとても豊かな経験だった。古い扉を開けてチャペルに入るといつでも、静かで落ち着いている。チャペル内いっばいに並ぶ素朴なすや天井の梁、窓ガラスの模様、正面にたくさん並んでいるオルガンのパイプ、十字架のステンドグラスから溢れる光など、何年、何十年と変わることのなかった光景であろう。その中に四季を通して身を置くことで、平素の暮らしにおいて忘れがちな心の平安をもたらされたように思う。

また、チャペルでの練習やレッスンは私にとって大きな喜びであった。練習を始めてすぐの頃、両手足をつかつての演奏は初めての経験だったので、小さな子どもがピアノを習い始めた頃のような状態だった。それでもさまざまな音色が重なった複雑で美しいオルガンの音色を聴けるだけで、心が躍ってしまうくらい嬉しかったことをよく覚えているし、その嬉しさは4年間変わることがなかった。

オルガンを通して学んだことのひとつとして、集中することの楽しさが挙げられる。楽譜を目で追いながら両手足をつかつて演奏し、自分が奏でた音色を注意深く聴くことで、ひとつのことに集中することの楽しさを徹底的に学んだ。そのため、練習の後は充足感でいっぱいだった。また、何度も楽譜を読み、そこからメロディーの規則性を見出す楽しさは、オルガンを習い始めて知った楽しさである。

これまで数回礼拝での奏楽を担当させていただく機会にも恵まれ、そこから学び得たことも多かった。キリスト教の教えが持つ豊かさに触れられたこと

はもちろんであるが、緊張している状態の中で、自分の持てるだけの力を精一杯出し切ることに集中することや小さな失敗をしてもめげない心の強さを持つこと、上手く弾けても弾けなくても自分を受け入れる謙虚な心を身につけることを学んだ。

このようにオルガンを通して学んだことは枚挙に暇がないが、その中でもっとも感謝しているのは人との出会いである。4年間、上達している時もそうではない時も、どんな時も変わることなく私を受け入れてくださった長谷川美保先生。そのお人柄に触れるたび、自身を省みることしばしばであった。また、週に何度か宗教部に伺ってきたが、宗教部スタッフの皆さまにはそのたびに温かく迎えていただいた。

4年間オルガン講座を受講できたことは、大きな恵みだったと感じている。心より感謝しております。ありがとう存じました。

社会福祉学科4年



改築後のチャペル（昭和初期）

～フィリピンワークキャンプ～

2005年フィリピンワークキャンプ

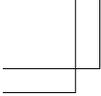
野村 晶子

2005年にワークキャンプという大きな経験をしました。フィリピンが初めての海外だったので、出発が近づくにつれて、期待よりも不安のほうが大きくなりました。初めての10日間の集団行動、初めての建設作業。どれもが私にとって初めての経験でした。

ワークキャンプの主な目的であるワークですが、初日は本当に疲れました。行く前から、役に立てるのか不安でしたが、役に立たなきゃと仕事を自分から探したし、みんなが一生懸命だったので慣れない仕事でも、休んではいけない気持ちでいっぱいでした。そのことが、その日のミーティングでも話題になり、夢中ががんばっていてよかったけれど、もっと休憩をとってぐらいの気持ちでしようという話になりました。初日から疲れてこれを毎日やるのは無理だと思いました。ボランティアとして私にできることはほとんどなく、現地の人がいつも助けてくれ、きっと私がやらないほうが仕事もスムーズに進むのだろうと感じました。ボランティアが与えるものなんて、本当はあまりないのだと思います。それよりも、ボランティアが与えられるものの方が多くて、私が来ている意味はなんだろうと思いました。でも、現地のスタッフやたくさんの子供たちは、ワークがお休みで会えないと、さびしそうにしている、会える日が来ると本当にうれしそうでした。ボランティアを通して感じたのは、自分がそれほど大きな存在ではないということの日頃から心に留めるべきではないかということです。現地の人も私たちに、特別大きなことを求めているのだと気づきました。それよりも、ワークをしながら日本語やタガログ語を教えあったり、言葉が通じなくてもその場の雰囲気や気持ちが通じて笑いが起こったり、そういう瞬間のほうが大切なのだと感じました。フィリピンで10日間過ごして一番印象に残ったのは、現地の人たちの温かい人間性でした。日本人に対する接し方は、昔の戦争の歴史など感じさせないくらい寛大さで、私たちを受け入れてくれました。ワーク中に出会った子供たちはすれ違うたびに手を振ったり、私たちに近づいてきてくれて、本当にかわ

いかったです。私の3分の1くらいしかない細さなのにとても元気で、その笑顔に毎日励まされました。フィリピンはとても貧しい国で、恵まれた日本に生まれた私はどんな顔をしていいか戸惑っていました。でも、そんな迷いはすぐに消えるくらい、私たちよりもずっといきいきしていました。それでも、町に出ると物乞いをしている子供たちに遭遇して、やりきれない気持ちになりました。毎日たくさんのご馳走が出されて、それを食べきれずに食事を残している中、一歩外に出れば貧しくて困っている人がたくさんいるという現状を考えさせられました。

そういった発展途上国としてのフィリピンを一番考えたのは、サービスマーケティングの一日でした。ごみ山の近くまで見学に行き、家庭訪問で生活に最低限の食べ物も食べられない家族にお話を聞くことができました。質問は少々失礼でも勉強になるなら聞いてもかまわないと言われましたが、どこまで質問してよいのかわかりませんでした。私の訪問した家族は、旦那さんを亡くしたお母さんが8人の子供を一人で育てている家庭でした。家は隙間だらけで、雨の日は床が浸水するのでベッドに家族みんなでのって、水をかき出しているそうです。一日中食べるものがない日はしょっちゅうだと言っていました。「でも幸せです」と言っていたお母さんの言葉が忘れられません。一番下の子も5歳でしたが、「今一番楽しいことは何ですか」と聞くと、「勉強」という答えがかえってきたので驚きました。私はてっきり「遊ぶこと」という答えがかえってくると思っていました。そして、「将来の夢は何ですか」と聞くと、「勉強」という答えがまたかえってきました。私は今、奨学金制度を利用して大学に通っていますが、自分のおかれている環境に不満ばかり持っていました。日本の大学生はほとんどが親に学費を払ってもらいながら通っているのに「何で私だけ」とひがんでいる毎日でした。そんな自分が嫌で、今回のワークキャンプに応募したのです。日本では学校に行って教育を受けられるのが当たり前になっていて、その反面真剣に授業を受けて学ぼうという意識を持った学生は、自分も含めて多くはないようにも思います。逆にフィリピンでは、仕事をするのにも高校を出ていないと職が見つからない状況で、子供が自ら勉強することを求めているのに、生活するのめやつのくらい学校に行くお金がない現状。どうして、日本の学生が学校に通っていて、学校に行きたい子供が教育を受けられないのが現実があるのだろうかと考えてしまいます。お母さんの夢は子供が学校に行けるようになることで、私たちにもぜひ奨学金の



募金に協力してほしいとの事でした。私は奨学金を受けている立場として、フィリピンの子供たちが一人でも学校に行けるように、私にできることがあるのだと思いました。私は本当に自分が恵まれているということを知ることができ、自分を恥ずかしく思います。

その家族に「私たちがこうやって訪問することをどう思いますか」と質問すると、「こんな家を見せることを恥ずかしい、ごめんなさい」と答えたので、申し訳ない気になってしまいました。私でも自分のプライバシーを人に見られたくないのに、私たちの為に家庭訪問させていただいたことに感謝しているし、この家庭訪問を無駄にしてはいけないと感じました。

日本にいと、自分より上を見ることばかりしてしまいます。ワークキャンプを体験して、自分がどれだけ恵まれた環境で暮らしているのか実感しました。同時にこの恵まれた国で生活している日本人よりも、恵まれた国ではないけれどフィリピンで暮らしている人のほうが幸せそうに見えました。実際のところは分かりませんが、フィリピンで出会った人たちは笑顔を絶やさず、一緒に過ごしていてこちらも楽しい気持ちになりました。ホームステイ先では特に家族の優しさに感動しました。バナイに着いたとたん子供たちが寄ってきて、手をつなぎながら遊んだことは一生忘れないと思います。ステイ先の家族も本当によくしてくれて、おなかを痛めて心配かけてしまったけれど、温かい家族でした。3人家族なのに親戚がたくさんいて、他の家の子も自分の家のように遊んでいて、こんなに人と人のかかわりが深いと感じたのは初めてでした。今まで自分ひとりでも乗り越えられると思っていたことも、支えてくれる人がいるからなのだと思います。バナイの人たちや、ワークでお世話になった人たちと別れるときは、涙が止まりませんでした。別れがさびしいのは、本当に幸せな時間を過ごすことができたということなので、出会ったすべての人に感謝しています。そして一緒に10日間を過ごしたメンバーがいなければ、成し遂げられなかったと思います。自分の未熟さにも気づき日ごろからたくさんの人の支えの下に生かされているということを実感しました。グループだからこそ成し遂げられることもある、ということに気づきました。本当にありがとう。

社会福祉学科3年

「フィリピンどうだった？」

佐津間 良子

一年前、私はこのフィリピンワークキャンプを知り説明会に足を運んだ。ボランティアという言葉もよく知らず、とにかく見知らぬ国に行って貴重な体験ができることに魅力を感じていた。その年は日程がサークルの夏合宿と重なっていて一年目はサークルを一通り体験したいとも思っていたのでとりあえず今年はいいか、と参加を諦めた。しかしそれはちょっとした言い訳で、自分から何かに一歩踏み出すことから行動することから逃げていたのだ。

後期になってワークキャンプにいった友達と話したとき、その行動力に感心したのと同時に自分が今まで物事に対して受身であったことを痛感し、二年こそは絶対に参加しよう！と決めた。今年もレポートや面接が課されたが、とにかく行きたいという自分の気持ちをそのまま行動に移したら幸運にも参加が認められた。“自ら動く”ということは簡単なことのように私にとってはとても大きなことだった。

初めてメンバーと出会ったときには同じにおい(?)のする人がいなくて不安でたまらなかった。しかし事前の研修会や合宿そして実際のワークを通してこのメンバーだからこそやり遂げられた！というほどみんなの絆は深まった。

事前研修ではメンバーとディスカッションやプレゼンテーションを通してフィリピンへの知識を深めるのはもちろん、意見をシェアしてお互いを分かり合うということを学んだ。

また、知識を深めるという点では、フィリピンを気候の面、経済の面、文化の面など色々な方向から知った。この事前の研修会や合宿があったからこそ実際のワークがより意義あるものになったと思う。

私は、ワークキャンプへの目的意識を高めるために
☆頭に入っている知識だけでなく実際現地へ行き現状を知り、ワークをする。
☆現地の人とたくさん話す。
という目標を立てた。これは私が実際フィリピンでのワークキャンプを通して学んだものでもある。

フィリピン上陸初日、一番印象深かったのは夜の街で物乞いをされたことである。想定内ではあったにしろここで初め貧困の現状というものに触れた。女性や小さい子供が両手を差し出してお金を求めてくる。その日その日を必死に生きる人々を見た。八日目に訪れたパヤタスには、マニラ全土のごみが集められるスモーカーマウンテン=ごみ山がある。スカベンジャーと呼ばれるごみを拾って生計立てている人の存在など、日本では考えられない現実がそこにはあった。

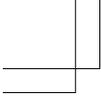
ワークではさらに自分たちには見慣れない風景、人々、環境に出会った。舗装されていない凸凹の土地にボロボロの家だか小屋だかわからないようなものが立ち並び、野良犬とちびっ子がそこら中にいる。ワークは毎日炎天下だったので、作業は思っていたより体力的にきつかった。しかし、みんなそれぞれがやるべき仕事を見つけて懸命に作業していた。

毎日のように子供たちに囲まれてわいわい騒いで、暗くなれば寝て明るくなればまた起きて、ありのままに自然の中で生活している気分だった。

自分の中でボランティアは人のために何かするものだと定義していたが、人のためというよりも自分のための活動がたまたま人の役に立っているかもしれないという感じるようになった。私は現地の人々にボランティアのために来たと言うことにとっても抵抗があった。現地の人々は私たちのようなよそ者が自分たちの領域に踏み込む事をよく思っていないかもしれないという不安があったからである。そこで思い切ってパヤタスの家庭訪問のときに訪れた家族に「ボランティアそれ自体についてどう思いますか？」と聞いてみた。返答は予想外にも、感謝している、もっと来てほしいということだった。その言葉を聞いてとてもホッとしたし、自分のやっていることに意味があると確認できた。

フィリピンの現状を知るなかで、自分の気持ちに変化があった。例えば正直私は子供が苦手だったが、フィリピンの子供は顔を合わせると必ず笑顔を見せるし（言葉が通じないせいもあるが）、こちらが何もしなくても飛びついてくるし、手をつないでくる。そんな子供たちに毎日囲まれていたので苦手も何もなくなった。今まで子供に全く関心がなかった自分が、帰国後日本で愛想のない子供を見るとなんと切なくなるのがその証拠だと。

生活面でも「洗濯機って画期的だね！」と友達と話しながら水道で洋服を手洗いしたり、その洗濯物をどうやって部屋の中でうまく干すか工夫したり、



生活の知恵を自分たちでひねり出していた。日本でそのまま生活していたら絶対に気づけなかったと思う。毎日そうして暮らしている現地の人々のパワーを知ると同時に、自分たちの日本の暮らしがいかに恵まれているかということについて考えさせられた。

フィリピンの人々はとても明るくオープンである。何でも話すし、聞いてくる。子供も大人もよそから来た私たちを仲間に入れてくれた。いくら生活が苦しくても、彼らはいつでも陽気で作業中困ったことがあれば何でも助けてくれた。特に子供たちの笑顔は無敵だ。

フィリピンの人々と過ごしていると豊かさとは何かと改めて疑問に思う。現地の人々と作業をしながらメンバーの一人が「日本は豊かだけど心は貧しい感じがしちゃうよね」と言っていたのがとても印象に残っている。心が貧しいというのはあまり感情を持たなく他人に関心がないという意味で考えた。確かに日本は物質的には満たされているが、心の貧しい人が多いと思う。私は日本人だし、日本が好きだ。だから他の国と比べて日本をマイナスに見てしまうのは悲しい。私は、これからの日本での生活で自分自身が温かい心を持ちたいと思う。

最後に、フィリピンへ行ったことよりもワークをしたことよりも私がこの旅で最も学んだことはチームワークである。集団行動の難しさもあり、仲間がいるからこそ得られる喜びがある。私個人は集団行動が大の苦手で、どちらかといえば何をする時でもあまり主体となって動くほうではない。しかし、このフィリピンワークキャンプでは、私はしっかりチームの一員としての役割、そして自分の居場所があった。全くゼロの状態から企画したレクリエーション、研修、合宿、ワーク中、そしてなんといっても毎晩開いたミーティング。その中で本当にチームと呼べるものを作り上げていった。そこに今回私が参加して得た“自ら動く”ということの結果すべてがあった。大学にはたくさんのチャンスが転がっているけれど、何をするにもまずそれを始める行動力が必要で、それ次第でいくらでも先が広がって今後につなげることができると思うと強く感じた。

帰国してから周りに「フィリピンどうだった？」とよく聞かれる。あまりに色々ありすぎたから、いつも「良かった。の一言に尽きるよ」と答える。本当にみんなと行けて、今回参加して良かった。

国際学科2年



全員集合!!
(2005年度ワークキャンプ参加者)

～ クリスマスツリー点灯式 ～

クリスマスツリー点灯式に参列して

三間 京子

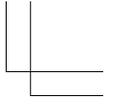
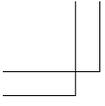
11月25日の夕刻、例年になく厳寒の今年にしては寒さの薄らぐ日に恵まれた点灯式に列席させていただきました。

記念館の前庭中央に植えられた、りっぱなツリーを見渡すように設けられた式典会場には、夕暮れ時というのに思った以上に人々が集まり、点灯式の期待の大きさを感じました。寒い中を式の最初から最後まで盛り上げてくれた、高校ハイグリー部の生徒さん達にも感激しましたが、それ以上に高輪ハッピーママーズの地域の方々の歌声と、そのお子様達をママ達が見守っている姿にほのぼのとした暖かさを感じました。

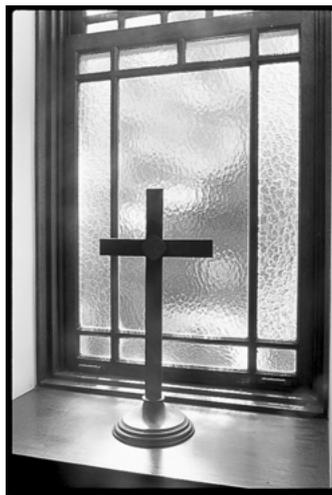
最後に「きよしこの夜」を全員で歌った後の点灯では、歓声と共に暗闇から光が溢れる瞬間に幸せな気分を感じたものです。学校生活の中で皆で共有する体験が、こんな素敵な点灯式で思い出のひとつとなる事も素晴らしいのではないのでしょうか。

明治学院大学保証人会 副会長





チャペル奨励集



～「新学期を迎えて」イースター礼拝より

青春の日々にこそ

《「コヘレトの言葉」 12章12 - 13節》

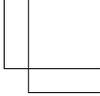
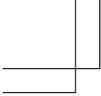
久世 了

それらよりもなお、わが子よ、心せよ。書物はいくら記してもきりがない。学びすぎれば体が疲れる。

すべてに耳を傾けて得た結論。「神を畏れ、その戒めを守れ。」これこそ人間のすべて。

旧約聖書の中の一書「コヘレトの言葉」は、以前は「伝道の書」と題されていたものですが、その冒頭に「エルサレムの王、ダビデの子、コヘレトの言葉」とあり、12章9節には「コヘレトは知恵を深めるにつれて、より良く民を教え、知識を与えた。多くの格言を吟味し、研究し、編集した。……」と、この書がどのような性質のものかが示されています。そして今日の奨励の題「青春の日々にこそ」は、その12章の書き出しの言葉から取ったものです。

青春という言葉は、すでに古い時代の中国の詩の中でも使われています。ここでは、人の一生が四季の移り変わりにたとえられていて、若い時代が春、働き盛りの年代が夏、中年から初老期が秋、そして老人といわれるようになった時期が冬、と表現されます。また青という漢字、その日本語読みとしての「あお」は面白いもので、「青々とした草原」などというように草木の繁る様を、つまりブルーだけではなく濃いグリーンをも表します。したがって、青春とは春、すなわち人生の始めの若い時代の中でも、かなり成長した段階を指しているのであって、大学生になった皆さんはまさに青春の真っ只中にある、というわけです。ですから、「青春の日々にこそ」と始まるこの12章は、コヘレトという知恵者がほかならぬ皆さんに向けて語っている言葉であり、その核心は、今読みました「神を畏れ、その戒めを守れ」にあるということが出来ます。



私が信仰を持つに至ったのは、もう青春を通り過ぎた26歳のときでした。私が子供だった頃にはあの大戦争があって、戦場で、そしてまた空襲を受けた都市で、沢山の人が死にました。そして身近なところでは、私の家族は家が空襲で焼かれ、焼け残った親戚の一部屋を借りて住んでいたのですが、敗戦直後の食糧難の時代に父が病み衰えて、誰も知らない夜中に息を引き取ってしまいました。こういうことがあって、10歳の頃の私にとって人はいずれは死ななければならないということが逃れようのない現実でした。戦争や病気がなくても、生きていられるのは長生きの人でも100年、永い地球の歴史から見ればほんの一瞬です。だから人生は空しい、とも思えますし、しかしその空しさを乗り越えて生きていかなければならないとすれば、どのように考えたら良いのだろうか。私の青春にはいつもその問いが付きまわっていました。その答えを見出そうと、いろいろ本も読み、友達とも議論をしたりしましたが、なかなか心の整理がつかみませんでした。

そうした中で大学を卒業、就職して間もなく、24歳のときに結婚しましたが、その相手はキリスト教系大学で学び、在学中にクリスチャンになった人でした。その年のクリスマスイブに、妻は近くの教会に行き、仕事を終えた私は教会で食事が出来るということで、初めて教会の集まりに参加しました。それまでキリスト教についてある程度の知識は持っていましたが、その夜教会に集まっていた人々の「生きたキリスト教」に触れたとき、ここに自分が求めていた何かがある、と直感しました。それがきっかけで、都合がつくときはなるべく教会に出るようにして理解を深め、ついに洗礼を受けることになったのでした。

聖書は人の死と生についての明確なメッセージを示しています。すなわち、まず人間は天地を創造した神が、「神の姿に似せて」創ったがゆえに、自由な意思で人を愛することが出来る。しかしまさに自由な意思を持つがゆえに人間は神を否認するという罪を犯し、その罪のために死が避けられないものになった。しかし、罪に対する神の赦しを得られれば、死は決して終わりではない。人間を愛する神はその独り子をイエスという人間の姿でこの世に送り、神を信ずるすべての人の罪の赦しを請うために、自らをいけにえとして十字架にかかって死ぬ。その十字架上のイエスの死を自分の罪のためだと告白することによ

り、人には死後の復活と永遠の命が約束される。そして神の子イエスは自ら復活を遂げてその約束を確かなものとされた。このことによって人間は、死に至るまで希望を持ち続けて生きることが出来る。そして、そのように希望を持って生き続けるとしたら、「神を畏れ、その戒めを守る」のは当然のことになるはずだ。旧約聖書の段階では神の赦しを得るための条件を示しているこの言葉は、イエスによって、赦されたものにふさわしい生き方を表すものとなっています。

以上で大急ぎで紹介した聖書のメッセージのポイントは復活です。イエスの復活を記念する復活節のお祝いは、もともとは春祭りです。草木の芽が萌え出る春は、冬の間死んでいた生命が復活する季節、と見る事が出来るので、キリスト教会は春祭りの時期に復活節を定めたのです。人生の本番のスタートとも言える青春の日々にある皆さんが、復活のメッセージが提起している死と生の問題から目をそらさず、自分が死を迎えたときにそれまでの人生を振り返って「良い人生だった」と思えるためにはどうしたら良いかを、聖書に親しみながら真剣に考えてほしいと願います。

学院長

4月13日



1931年（昭和6年）当時のチャペル

～「新学期を迎えて」イースター礼拝より

すべてのことに時がある

《コヘレトの言葉3章1－8節》

鶴殿 博喜

私は旧約聖書のコヘレトの言葉が好きで、自分の根底にはコヘレトの言葉があると思っているほどです。

学生時代のことを少しお話ししてみますと、私が通った大学は私が新入生だった1968年の終わりごろ学園紛争が始まりました。翌69年の2年生のときは一時期大学が封鎖されたということもあり、こつこつ勉強する意欲も失せてほとんど授業にも出ず、毎日議論に明け暮れていました。私はドイツ語を専攻していましたが、この1年間はほとんどまったく授業でドイツ語を学ぶことをしませんでした。そのかわり、日本橋の丸善で原書を買ってきて、それと格闘することで、かろうじてドイツ語と関わりをもちつづけました。その本はヘルマン・ヘッセの『シッダルタ』という小説で、とにかくドイツ語を1年間しかまともに勉強していなかったため、ほとんどの単語を辞書で調べながら、全ページ真っ赤な線で埋まるようにして一冊読み終えました。

3年になって1年生のときドイツ語の手ほどきを受けた女の先生のゼミに入りましたが、私が1年間ほとんど授業に出なかったことを知ったその先生は、「もったいなかったわね」とひとことおっしゃいました。しかし私にとってはもったいないどころか、その1年はとても貴重な時間だったのです。教室では学べない多くのことを、ハンガーストライキやデモや議論やおしゃべりをおして学んだ1年だったからです。あとになってこの1年は私に定められた時だったのだと確信しました。

時というのは過ぎてしまったあとになってはじめてその意味が意識されません。今という時をどのように過ごすのか、あとになってそのときの時間の自分にとっての重要性がわかってきます。

私は結局この1年間の授業に出なかったついでに、つまり単位を大量に落としたりついでに4年生になって支払わなければなりません。卒業論文のため

の苦勞と単位をとるための苦勞を二重に負わされたわけです。しかしかといつてあの1年間を後悔したことは一度もありません。

学生時代は時間があり余るほどあります。こんなに長期の休みがあり、暇がある生活は、仕事を退職するまで二度とないことです。学生のみなさんはこの暇な時間をどのように使うのでしょうか。

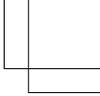
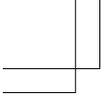
時といえば読書にも時があるといえるでしょう。ここでも個人的なことをお話ししますが、けっして読書家とはいえない私にもささやかな読書体験があります。高校時代はドストエフスキーに熱中しました。ドストエフスキーの作品は私に人間にたいする見方を教えてくれただけでなく、極端に見える作中人物がなんと人間の真実の姿を表していることかということを知らしめてくれました。もし私が30代40代ではじめてこの作家を知ったら、ずいぶん違った印象を得たかもしれません。このことは、大学1年生のときシェイクスピアのほとんどの作品を、もちろん翻訳で読んだわけですが、そのことによって得た文学の面白さや知見についてもいえます。違った年代で読んだらこんな瑞々しい生き生きとした印象は得られなかったでしょう。そういう意味で本を読むにも時があるのです。

学生時代私は二度だけ旅をしました。一度は上級生と二人でした東北一周旅行でした。とにかく貧乏旅行で、鉄道で町に着くと公衆電話の電話帳でその町の教会に片っ端から電話をかけ、会堂の片隅にでも泊まらせて欲しいとお願いをします。そんな泊まり方をしたり知り合いの家に泊めてもらったりといった具合で、最後の日だけ連れ込み宿のようなあやしげな安ホテルに泊まりました。しかしこんな旅だからこそじつにおもしろいつまでも忘れられない旅になりました。また3年生のときに機会を得て、ドイツの大学の夏期講座に3週間参加するついでに、二ヶ月半のドイツ滞在をしました。これも私にとってはかけがえのない経験でした。まだ日本と国交のなかった旧東ドイツを一人で旅行したのもこのときでした。怖い目にも遭いましたが、私の血肉と化した経験となりました。

議論、読書、旅はすべてが融合して私の一部となり、この世で無駄なことはなにもない、すべては相働きて益となるという強い確信を得たのです。

副学長

4月15日



光の子として歩みなさい － 幸せなら態度に示そうよ －

《エフェソの信徒への手紙 5 章 8 - 9 節》

木村利人

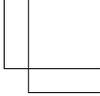
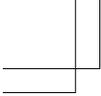
今日、この森の中にある明治学院の素晴らしいチャペルで、美しいオルガンの調べに包まれて、礼拝の一時を持てますことを心から感謝したいと思います。

私たちは、たった一回限りの人生を生きています。皆さん方は、この学園での友人たちとの様々な出会いの喜びや、また学ぶ喜びを体験されておられることと思います。ワークキャンプに参加されたり、聖書を学んだりすることでも、きっと新しい体験や出会いを経験されたことでしょう。

今日は、私の学生時代の体験をお話しましょう。実は、私が学生時代に作った歌があります。皆さん方も多分良くご存じの「幸せなら手をたたこう」という歌の作詞者は私なのです。これは、「幸せ」の歌なのですが、「平和」に生きようという聖書のメッセージが入っているのです。この原曲はスペイン民謡ですが、私が早稲田大学の学生時代に参加したフィリピンでの YMCA ワークキャンプでの体験に基づいて作ったのがこの歌詞です。

フィリピンでの労働奉仕の主な仕事は、トイレの穴掘り作業でした。これが日本軍に侵略された農村地域復興のための「公衆衛生活動」だったのです。今から 40 年以上も前のことでしたが、悲惨な戦禍の残骸を目あたりにし、犠牲者の悲しみにふれ、日本の若い世代の参加者一同は大きなショックを受けました。しかし、一緒に汗を流し仕事をし、聖書を読み、祈りをしていく中で、フィリピンの友人たちは、タガログ語で「タイヨアイマカイビガンカイクリスト」と語ってくれました。

「私たちはキリストにあって、一つなのだ」と言う意味です。戦争の苦しみや悲しみ、日本への憎しみを越えて、平和な世界を作ろうと私たちに語ってくれたのです。その時読んだ英文聖書の箇所が旧約聖書の詩編 47 の「みんなで



手をたたこう。神に向かって喜び歌おう（木村利人・訳）」でした。そして、フィリピンの友人たちは「態度に示して」私たちに本当に親切にしてくれたのでした。

神によって生かされている平和の「幸せ」を「態度に示して」生きていくようにと、私たちは神によって召されていることをフィリピンの友人たちから教えられ、その感謝と感激の体験を帰国途次の船の中で作詞したのです。

戦争や災害や飢餓や愛する者の死など、私たちは大きな悲しみや、また誕生や入学や就職や結婚など喜びの涙を共有しながら（ローマの信徒への手紙 1 2 章 15 - 16 節）この世の、一瞬のいのちの恵みの光芒を、神の救いの光に照らされつつ生きているのです。私たちキリスト者は、いのちも財産もすべては「神様のもの」だとしています。これはすべてを最初から「ゆだねる」発想ともいえましょう。それは結果的には確かにそうだと言えるのですが、パウロはコリントの信徒への手紙 I の中で（3 章 2 2 節）「世界も生も死も、今起きていることも将来おこることも。一切は、あなたがたのもの」と語っているのです。

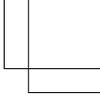
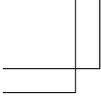
このパウロの言葉「あなたがたのもの」というのは、安易な「ゆだね」の発想ではなく「責任ある態度決定をして生きなさい」というメッセージなのだと思います。

だからこそ、続けてパウロが言うように「あなたがたはキリストのもの、キリストは神のもの」なのだという 2000 年前のメッセージに私たちは圧倒されるのです。

つまり、私たちは、それぞれの生と死と、現在と未来について、それぞれ責任をもって生きる、つまり忠実な管理者（コリントの信徒への手紙 I 4 章 1 - 2 節）としての神への応答による「自己決定」で生きることが許されているということなのです。

私が専門としている「バイオエシックス（生命倫理）」という学問の基本的原理の一つは、この「自己決定」という考え方にあるのです。この自己決定の考え方は、自分勝手ということではなく、神と人との関わりに基づいた「関係の中での責任ある自己決定」ということであると私は思っています。

聖書は、私たちの生と死と現在と未来を「光の子として歩みなさい」（エ



フェソの信徒への手紙5章8節)と語っています。この「光の子として歩みなさい」ということの具体的内容として、この同じ聖書の箇所が「リビングバイブル」(1975年刊)では「そのことを態度で示しなさい」と訳されていることに、是非注目して下さい。

もしかすると、私の「幸せなら手をたたこう」が1950年代に大ヒットしたので、その歌詞のキーワードである「態度に示そうよ」がこのように1975年に刊行された聖書の訳にも影響を与えたのではないかと考えています。

私たちは神により一つとされ、平和に生きる喜びこそが「幸せ」の根拠であり、それを「態度に示す」というライフスタイルをとるようにと、聖書は私たちに告げているのです。

光そのものである神を見つめつつ、神の輝きによってのみ輝くことの出来る「光の子」として「態度に示し」つつ、一回限りの人生をともに歩んで行くではありませんか。

早稲田大学名誉教授

11月21日

～「命」より

逆転足し算で生きる

《ルカによる福音書10章38 - 42節》

深谷 美枝

先日ある学生が私のところへ来ました。相談に乗ってください、というのです。「私は小さい頃から養護学校の先生になりたかったんです。でもせっかく社会福祉学科に入ったのだから、社会福祉士も取って履歴書に書きたいのです。でも四年間で両方取るのは無理だって言われるし、どっちかを棄てると考えるのは苦しいんです」学生にはよくある悩みです。私は言いました。「あなたにとって、なくてはならないものは何なの?どっちの資格がメインなの?」「養護です。」「だったら、なくてはならないものとあったらいいものを分けたら。無理だと分かっているものを両方追っかけたら苦しくなるだけだよ。」

学生の相談事を聞いているとよくあるのは、何が「なくてはならないもの」で何が「あったらいいもの」か分かっていないことです。これは学生だけでなく、世の中全体がそうなのかもしれませんが、「なくてはならないもの」から始まってあってもなくてもいいようなもの、あったらいいものと思われものに眼を向けさせていき、欲望を肥大させていく。あれば自分のアイデンティティーが飾れる。自分が大きく感じられる。というものにどんどん囚われていく。そのうちに自分が何をしたいのか、誰なのか、分からなくなる。そして得ること自体にとらわれて苦しくなってしまう。もっと手にしたい、しかし、出来ないから、フラストレーションを感じてしまう。「なやみ」という形で表現されることには結構こういうことが多いのです。私はこういう生き方を「足し算の人生」と呼んでいます。必要なものをもっともっとと自分に取り込む。こういうスキルが欲しい、学歴が欲しい、趣味が欲しい。かくいう私も、2002年に突発性難聴で左耳の聴力を失うまで、そのパラダイムで生きていました。

しかし、病気をしてから、余分なもの、なくてもいいものをどんどん削って考えるようになりました。実際に体力も気力もついていかないし、自分の人生の残り時間が無限にあるわけではないということも分かりました。そこで考

えたことは、あれはなくてもいい、これはなくてはならない。そうすると生きることがすっきりしてきたのを感じました。足し算したら自分になるのではなくて、引いてそこに集中していけば行くほど、実は人間はその人、つまり自分になれる、ということが分かりました。「引き算の」人生を始めたのです。でも、引き算はそれでは終わらない。そこが「みそ」なのです。私には二人弟と呼んでいる年下の男性たちがいます。ひとは明日現れる S 牧師です。もうひとはクリスチャンではないのですが、前の大学で助手だった I 君という人です。彼は高校の時に脳腫瘍を切って体に障害を残していました。体に無理が出来ないので、いつも大切なことは何か、ということだけを残して生きている。その彼が言ったことですが、「そうして引き算をしていくと、思いがけずにそれ以上出来たこと、それは恵みなんです。」今日一日元気で働けた。それは恵み。ご飯がおいしい、それは恵み。五年しか生きられないことを考えたから、今まで二十年も生きられたから、それは恵み、なんです。

この間、去年バイク事故にあって二週間意識不明の重体だった学生が同じようなことをクラスで話していました。「僕は事故にあう前は、生きていることに意味が見つからなかった。虚しさも感じていた。しかし一度死んで僕は生き返った。そうしてみると、生きていること自体にどれだけ価値があるか、分かったんです。事故にあわなかったら、絶対に分からなかったことですが、ご飯を残すことさえ、今は出来ないんです。生かされているんですから。」彼の場合には無理やり引き算させられてしまったので、すっきりと整理がついてしまったのです。今日読んだ聖書の箇所では忙しく立ち働き、多くのものに気を配るマルタとなくてはならぬもの、神の言葉に聴き入ってそこから動かないマリアとがコントラストで描かれています。マリアはなくてはならぬものを選び、そこに立ってきつと自分を越えたもの、自分を越えたところから来る「恵み」「光」を味わうことを許されたことでしょう。どうか苦しいときに自分を整理してみてください。なくてはならないもの、とあったらいいものを。そしてそれを引いたときに逆転足し算で与えられる光を味わってみてほしいのです。

社会学部助教授

5月11日

～「秋、実りの季節です」より

育つ種

《マルコによる福音書4章28節》

司馬 純詩

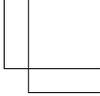
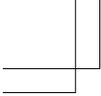
みなさんが踏みしめている大地は、土から成っています。土は種に栄養を与え、はぐくむ。種をはぐくむ大地は、大いなる神の体です。みなさんはそこに育つ小さな種です。

筋金入りのキリスト者の多い明治学院ですが、私はまだ種の段階をやっと脱皮したところです。はじめてキリスト教会に行ったのは、40年以上もまえの14才、中学生のときでした。私は中国人と日本人の間に、中国で生まれました。小学生のときに日本に帰ったのですが、差別や貧しさなどを経験しました。同級生のように遊んだり勉強したり出来ない境遇にあって、自分が何者なのかわからず苦悩していた時期に、教会に出会いました。熱心に通って、そのころの子供の仕事である牛乳配達の給料一ヶ月分ほどで、聖書を買いました。今もそれを大切に使っています。その後大学に入学して、麻布にある大きな教会に通いました。

大学を卒業してから後に妻となる女性と知り合い、アメリカ行きを決心します。アメリカで大学院に入り、ポートランドとシアトルで、バプティスト系の教会に通いました。どの教会も、日本から来た若者に寛大で、洗礼について問われることもありませんでした。もっとも私にとっては英語を学ぶことが、第一の目的でした。礼拝や交わり以外にも、教員がボランティアで外国人に英語を教えていたのです。

やがてホンコンの大学を経て、明治学院大学に勤めるため帰国します。そして大学が横浜キャンパスのチャペルに明治学院教会を立ち上げるときにお手伝いし、通いました。その後、私は研究のための年をもらえることになり、一年間マンハッタンにある二つの大学に所属して、自宅から近い7番街にある日系の教会に通いました。50年代に改革派と長老派の教会が合同して作った教会です。

この教会は、日本語と英語が公用語ですが、二つの言葉で結ばれたらしい



ろな人たちが集まります。日本で育った韓国・朝鮮や中国・台湾系移民や日系人、日本と関係のあるヨーロッパやアフリカ系の人たちです。多文化を凝縮したような教会でした。主任牧師は、日本人と結婚しているヨーロッパ系のアメリカ人でした。

厳格な、そして教会員どうし極めて礼儀正しい教会ですが、私にはとても居心地のいい教会でした。それまでに、中国、日本、アメリカでの生活を経験したわたしは民族や国家、権威や権力について大きな疑義を持っていました。この教会は、私のような多文化的背景の人間を、すべて受け入れてくれました。在日出身の移民や日系の人たちは、私の多文化的背景と疑い深い性格は、説明をしなくても、みんな良く理解してくれたのです。魚が住みやすい水を見つけたような安堵感が、私にはありました。

この頃は、日系人のアーサー・カミツカ博士が牧会していました。アメリカに生まれ、戦時中は強制収容所に過ごし、戦後勉強して博士号を取り、北海道で長い間大学に所属して教師と牧師の仕事をしていました。民族や国家を超越して考えるすばらしい人でした。私はこの牧師のもとで洗礼を受けることにしました。永い間、大きな覚悟がいて考えていた洗礼が、このときは自然に受け入れられたのです。以来、帰国してからも、私は英語で礼拝する多文化的背景の教会に所属しています。

人には、性格に合う教会や、肌合いの合う仲間がいるものです。とすれば、洗礼も受ける時と場、めぐり合わせがあるのではないかと思います。それまで皆さんは、いわば小さな種です。「土はひとりでに実を結ばせるのであり、まずは茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる」（マルコ福音書4-28）と聖書にはあります。イエスは神の国とは、種であるみんなが育つ土であると、言っているのです。

そして実は、イエス・キリストはみんなの心の中にある小さな種である、とも聖書は記しています。マタイ伝13章24-30節で別な意味の種の話がありますが、章の始めの方で逆に神が種を撒いたとき、これが良く育つのは「信仰を受け入れる人」とあります。そこでは人の心が土にたとえられ、教えという信仰を神様があなた方に撒いたとき、これを良く大きく育てるのが、教えをよく吸収する心であるとしています。種のたとえ話はこのように「入れ子」構造になってい

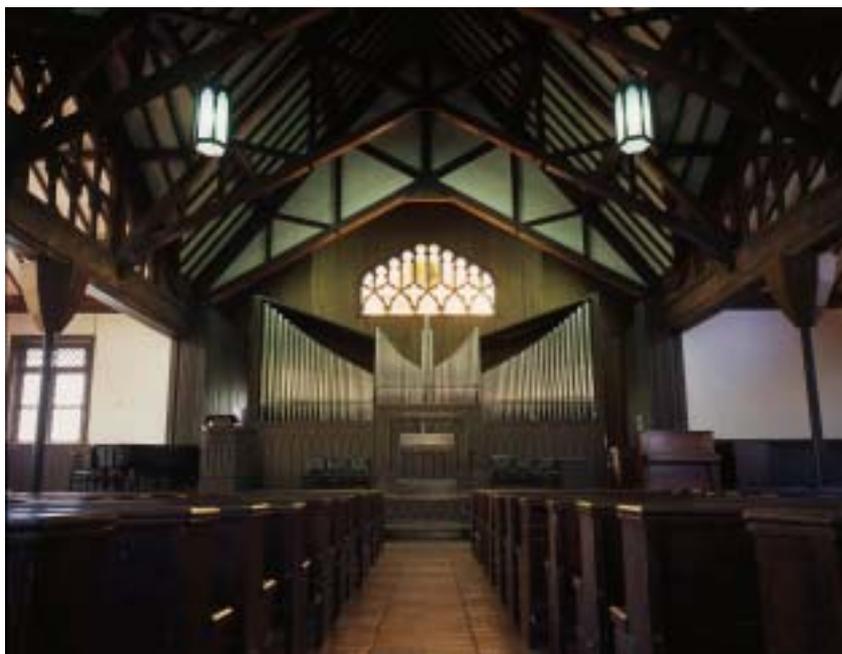
ます。入れ子の素材として種と土、教えと心が用いられているのです。

若い皆さんは、まだまだこれから育つ小さな種です。マタイ伝にはまた、人は小さなからしの種として土である神のもとで大きく辛いからしに育つともあります。同じ話はルカ伝にも挿入されています。

ただ、先のマタイ伝では土にまかれた種には「毒麦」もあり、育ったら焼かれる運命にあるとも記されています。小さな種であるみなさんには大きな未来があります。心の中の土をやわらかくして、教えの種を受け入れ、秋の実りに向けて育て、自らも毒麦とならないように大きく育ちましょう。

国際学部教授

9月28日



現在のチャペル正面（パイプオルガン）

～「ワークキャンプを通じて」より

今を共に生きる

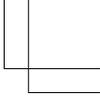
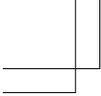
《詩編 85 章 9-14 節》

加藤 良典

奨励を行う前に、皆さんにある物語を紹介したいと思います。物語のキーワードは「今」と「共に生きる」です。

ある若者達は南の国のある村に行って、そこに住んでいる人達と一緒に家を建ててきました。彼らが出会った南の国の人達は、見かけは厳つくても素敵な笑顔をいつもしていた黒いおじさん達でした。そのおじさん達の素敵な笑顔のお陰で、若者達の不安が抜けていきました。おじさん達と村の住人と共にみんなで、何日か家を建てました。また若者達は、その国の学校や孤児院へも行きました。若者達は、そこで出会った子ども達と一緒に歌を歌いゆっくりとしながらも楽しい時間を送れたのです。子ども達も若者と出会え、一緒に歌えてとても嬉しそうでした。その後おじさん達の一人が、こんなことを若者に教えました。「人は、皮膚の色なんかに関係なくお互いを大切にしなければいけないし、心の持ちようではそれは出来るよ！」と自信満々に語りました。若者達もそれを真に受けている様子でした。そのため若者達は、村の人々は一人一人がそれぞれのペースで「今」を過ごしているのだ、お互いがお互いを助け合いながら「共に生きている」のだと心から熱く思えるようになったのです。つまり、「今を共に生きる」のです。

しかし南の国の町では、その国の夜の冷たさのように若者達の心は一瞬で冷めました。彼らはその国の悲惨な現実を見てしまったのです。ショッピングモールの近くでお金を必死になってねだっている子ども達、赤ちゃんを抱えながらゴミを拾っていた子ども達、身体の一部が腐っているため身動きがとれない人々。ほろを身にまとい、全身が汚れている彼らの切なくて痛々しい表情とジェスチャーは、若者達に悲しみを超えたショックと絶望を心に残しました。また、必死になって物乞いをしている子供達に虫を追い払うように罵声を浴びせる大人達の姿に、若者達は恐怖を抱きました。あまりの光景に若者達は、こ



のような子どもと大人達を見たくないと思うようになり、ついには無視をしてしまいました。若者達は、その後もおじさんの言葉と現実とのギャップに板挟みされ気持ちが揺らぎました。何よりも助けを求めてくる人々に目を背けるしか出来ないことに、やるせなさを覚えたのです。彼らのこの気持ちは、結局おさまらないまま物語は終わってしまいます。

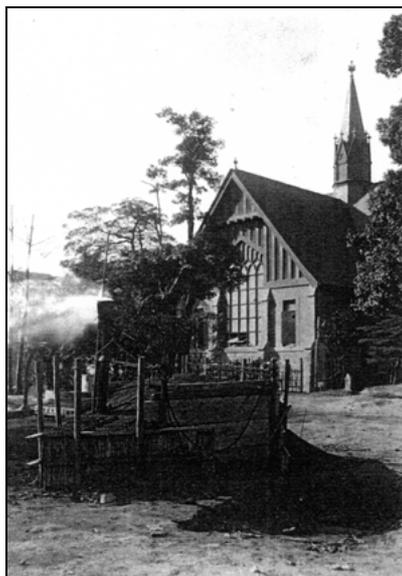
この物語のステージは、インドです。実はこの物語は物語ではなく、私と他のインド GV メンバーが体験したインドの「今」のほんの一部だったのです。その「今」の殆どは、不条理な苦痛と暴力に満たされたものでした。人が、人として「共に生きる」ことを許されない残酷な「今」です。その「今」は一人一人の人間が、全ての物事に目を背けて借り物の解答でその場をごまかしていくことの積み重ねで存在しているのです。私は、インド滞在中に何度も愕然としました。私もいつの間にか、その「今」を作り上げている人間の一人ではないかと思えたからです。物乞いの子も達の存在は、「今」の社会では絶対に許されない事態のはずなのに、いつの間にか当たり前の「今」の現象なのだと無意識のうちに価値観が変化してしまったのです。

帰国してきてから、自分の心をフラットにしてもう一度インドの出来事に思いを馳せてみました。物語としてのインド GV では、若者達は何も考えずに終わってしまいましたが私はインドで体験出来た希望、すなわち「今と共に生きる」をもう一度注目してみることにしました。物語の中で黒いおじさんが、熱く伝えてくれたあの言葉をどのようにすればリアルにしていけるのか。私なりに、その方法の根源である価値について考察してみました。矛盾と暴力によって作られた「今」ではなく、人々が生存、幸福、帰属性、自由を保障され、自分自身のペースを保てる時間を持てる「今」を。そして様々な疑問にみんなが真摯に向き合って考え直していくことで「今」を新しい良いものへと変えられるのではないかと考えました。また、そのようなプロセスを通じていくことで最初はそうでもない人も、いつの間にか周りの人々から温かさを分け与えられその連鎖反応をまた周囲へと繰り返す。そのことにより少しずつ他者の存在をよりよく認め合っていける風潮と「今」を共に創り上げていく意志、つまり「共に生きる」ことの意義が芽生えてくると思います。

この二つのプロセスが価値としても、実践としても芽生えたときに初めて

人々は「今を共に生きる」ことが出来るのではないのでしょうか。私は、「今を共に生きる」ことの素晴らしさがインドだけでなく世界中にもっと広まり、世界に住むみんなが愉しく生きられるようになって欲しい、そのために自分の出来ることを積極的にしていきたいと強く思います。このように考えられたことも、誰かと一緒にいられることがこんなにも尊くて愛しく思えたことは、インドGVに参加するまではありませんでした。私にとって「今を共に生きる」ことの素晴らしさを、改めて見直せた体験だったのです。

社会福祉学科2年
5月20日



礼拝堂と炭焼きがま
(戦時中、杉本民三郎氏撮影)

～キリスト教週間「学院スピリッツ」より

社会的弱者と共に生きた賀川豊彦

《マタイによる福音書25章31-40節》

加山 久夫

賀川豊彦（1888-1960）は明治学院神学部予科を終えて、神戸に誕生した神学校で勉学を始めようとした矢先に肺結核が再発し、医師から長くてあと二、三年の寿命であろうと宣告されました。それなら最後を生きがいのある生き方をしようという決意し、当時、関西で最大のスラムといわれていた神戸の葺合新川地区に入っていったのです。1909年12月24日、賀川豊彦21歳のときでした。彼はすさまじい貧困、売買春、病気、犯罪、暴力など、想像をこえる生活環境のなかで、転がり込んでくる病人などの世話をしながら、日曜学校や職業紹介など、いろいろの「救貧策」を考案し、忙しい日々をすごします。彼はそこで生活するなかで、周囲の人々の素朴な優しさや人間的な面白さなども発見します。その生活の中で、彼の健康は徐々に回復し、結局、1923年の関東大震災救援のため活動拠点を東京に移すまで、13年半の間スラムに生活することになります。その間に、そこから広く社会に向かってスラムの実態を知らせ、「防貧策」を打ち出してゆきました。その頃非合法であった労働組合運動、普選運動、協同組合、農民組合など、数々の困難な運動を展開したのです。賀川の名と働きを一躍世間に知らしめたのは、自伝小説『死線を越えて』（大正9/1920年）（32歳）でした。作家たちからは素人の作品として評判はよくなかったのですが、爆発的に売れて、初年度に100万部を越えています。彼は、今日では恐らく10億円を超える莫大な印税をすべて彼の活動のために使い、その運動をさらに広げてゆきました。

困っている人たちがいたら、どうすればその人々を助けることができるのか。そのことを考え、実践するうちに、彼の活動分野はさまざまに広がってゆきました。まさしく、Do for Others を実践した生涯でした。

私たちは、何かを見たり、考えたりするとき、どこから見、いかに考えるのかということが重要です。1992年はアメリカ大陸発見500年の年として米国ではさまざまな行事が行われました。その年、私は研究休暇でアメリカ

のボストンにいましたが、「アメリカ大陸発見500年」に批判的な声も多くありました。そもそもアメリカ大陸発見とはなにごとか、すでにずっと以前から先住民がそこにいたではないか、その後の歴史は先住民を犠牲にしたものではなかったのか、等々。これらの声をうけて、国連では1993年を国際先住民年としたのでした。このように、同じ事柄でも、どこからそれを見るかによって、見え方が全く違ってくるのです。

英国の思想家チェスタートンが「神は細部に宿りたもう」と語っています。このことは特に聖書が教えている神、イエスが指し示した神について、まことに重要な、正しい視点を示唆しています。マタイ福音書25章31節以下のイエスの譬えは、私たちがやがて神の前に立つとき人生の総決算をされる場面を描いています。神はある人々に彼らが生前神のために行ったわざについて、謝辞を述べ、ねぎらっています(34-36節)。しかし、その人々には神様のために何かをしたという心当たりがありません(37-39節)。すると、神は彼らに答えて言います。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(40節)

賀川がキリスト者としてスラムに入っていったのも、社会のいと小さき人々、いや小さくされている人々のところにおいて、何か自分にできることをしようとしたことにほかなりません。アルバート・シュヴァイツァーやマザー・テレサの生涯もそうだったのでしょうか。私たちはスラムに生活したり、アフリカに出かけたり、カルカッタで奉仕活動をするのではないでしょう。マザー・テレサは日本にも、どこにも、カルカッタがあります、そこであなたの出来ることをしなさいと言っていますが、私たちには私たちに出来ることがあると思います。

現代の日本で若者の半分以上が高等教育を受ける時代には、大学生であることは特別なことではないかもしれませんが、しかし、広く世界を見渡す時、大学生であることはきわめて特権的です。どのような分野で専門的な学びをし、将来どのような分野で働くとしても、みなさんがいかなる視点から、どのように人間や社会や世界を見るのかということは、大変重要な課題です。

本学名誉教授

10月21日

～「秋、実りの季節です」より

実りゆくためのパッション

《ヨハネによる福音書15章1-15節》

濱田 辰雄

秋は実りの季節です。稲、作物、柿や栗などの果物、そして秋桜などの花々。わたしたちはそれらの秋のみりによって生命が養われ、心が潤されます。

しかし人の成熟は、他の生物と違って何もしないで放っておいてはそうなっていないけません。人の成熟、成長のために必要なのは、まずまわりの人々の愛情がなければなりません。親、兄弟、その他のまわりの大人たちがその子の成長を心から願っていること、それがあって初めて人は成長へと向かうことが出来るのです。

次に必要なのは本人自身の生きる意欲です。現代はとても自殺者が多い時代です。毎年3万人以上の人々が自ら生命を絶っています。しかもインターネットで集団自殺が呼びかけられ、それに応じる人々がいて車内で数人が自殺していく事件が後を絶ちません。さらに子どもたちまでもが次から次へと自ら死に向かっていっています。8月だったでしょうか。宮城県登米市で中学生の男の子が交番に押し入って警官の銃を奪おうとした事件がありました。銃を奪うことに失敗して取り押さえられた時、彼は警官に「その銃で僕を殺して下さい」と叫んだそうです。この叫びに胸を痛めない人がいるでしょうか。中学生ですすでに人生に絶望しています。これで人生に実りをあげることもなんかできるはずはありません。

私たち人間が実ってゆくためになくてはならぬ愛と生きる意欲はどこから来るのでしょうか。エゼキエル書に「イスラエルの家よ、あなたがたはどうして死んでよかろうか。私は何人の死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」（18章31～32節）と言われています。神こそが一番熱烈に私たちが生きて成熟することを望んでおられる

のです。

主イエスも「群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れるのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた」（マタイ福音書9章36節）のです。倒れている人々を何とか立ち上がらせたいと願って折られます。その深い思いが十字架の犠牲の死へと至らせました。主は一旦はご自分を裏切ってしまうペテロに言われました。「わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたがたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ福音書22章32節）。この主イエスの熱い思い、パッション（情熱）がペテロを立ち直らせたのです。

人が人として成熟し実りをあげるために、神は全情熱を傾けておられます。「神は、わたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに愛しておられる」（ヤコブ書4章5節）、この神の「ねたむほどの愛」が私たちに生きる意欲と力を与えてくださいます。

人は自然のままでは熟することができない、どうしてもそこへ向かうための「情熱」がなくてはなりません。その情熱をどうやって自分の中に持つことができるか、それが現代人の深刻な課題です。神との出会い、ここにこそ成熟の秘義があります。

聖学院大学キリスト教センター幹事・緑聖教会牧師

9月27日

～「秋、実りの季節です」より

「平和を愛する人となれ」

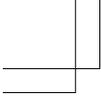
《ルカによる福音書 21 章 5 - 6 節》

大塩 光

NHKのニュースでアメリカのメディアが実施した原爆についてのアメリカ人の世論調査の結果が出ていました。原爆は正しかったとする人が57%もいるのです。戦争を終わらせるためには仕方がなかった。多くのアメリカ人はそう思っている結果です。しかし広島の上空600メートルで炸裂した原子爆弾は、爆心地付近を一気に4000度まで熱し、爆風で数万人を一瞬にして吹っ飛ばし、毎年毎年被爆による被害での死者の名簿を増やし続け、約14万人の命を奪ったのです。たった一発で。本当にそれが平和のために必要だったのでしょうか。

今年は第二次大戦後60年という記念すべき年です。どうやって戦争体験を風化させずに語り伝えて行くことが出来るだろうか、真剣に考えなければならぬ時なのだと思います。今は繁栄を誇るとまでは言えないまでも、それでも日本はだいぶ豊かです。アメリカも日本もそうですが、今日の箇所のイエスの預言の通りに、まさに跡形もなく崩壊する時が来るのかも知れません。

イエスの時代、当時のイスラエルにはヘロデ王によって拡張されて維持されていたエルサレム神殿は沢山の参拝者が訪れ、宝物殿には宝が山と積まれていて、美しい姿を保つために富がふんだんに注ぎ込まれていました。しかしイエスはその見た目の美しさ、繁栄の象徴のような神殿を当然良くは思っていませんでした。やがてはこんな見せかけだけの石の塊は、跡形もなく崩壊するだろうと警告していたのです。眼に見えるもの全ては虚しいもの、つまりやがては壊れ去るものであるから、それに心を向けて行くことは非常に弱いのだということを教えてくれています。



ルカが伝えているこれらの言葉は、現代のエルサレム神殿、つまり自分達の富を守るために他者を排除し続ける大国の姿に見えないでしょうか。見た目は華やかで、豪華絢爛で、言いたいことが言えて、人権が守られていて自由で。アメリカや日本やイギリスがまさにそうです。テロによって狙われ、その恐怖におびえて増々軍事力を強化して、自分の国の繁栄を維持するために国民をだまして取り返しの付かないところに引きずり込もうとしている。私たちがテロを問題にし自爆テロの攻撃を批判します。しかし大国がテロ撲滅の名目で大規模攻撃を仕掛けて、日々多くの人々を虐殺していることにはあまり触れません。何もないところにテロリズムなんかは起こらないのです。テロはもちろん良いこととは思いませんが、その前に祈ることがあるはずです。大国のエゴによって苦しめられている人々に真実の平和をもたらしてください。そして自分のことを棚上げし続けるアメリカ、日本、イギリスなどの国々が本当に謙虚に世界と向き合うことが出来ますように。これが今なすべき祈りです。自爆テロなんていう方法しか取れないくらい追い詰められている人々がいるということは、その人々を追い詰めている国があるのです。そのことを忘れて、テロが世界中から無くなりますよになんていう無責任な祈りは出来ません。

もちろん全ての武器も暴力も私は反対です。けれども社会的弱者が大きな敵に抵抗するための暴力だけが取りざたされて、社会的強者である先進諸国からの情報だけで全てを判断するように私たちは導かれています。もちろん私は追い詰められてテロリズムに走る人々の暴力的な方法を支持はしません。と同時に、先進国が他の国々から搾取して、自分達の高度な産業を維持するために石油を奪い取ろうとして起こす戦争や、世界一の核兵器の超大国でありながら小さな国に核兵器を放棄せよと追い詰めるような態度も支持はしません。

日本は平和憲法があるのです。成立の経緯がどうあれ地球人としてみて世界平和を希求する憲法が素晴らしければそれで良いと思います。広く人間愛を唱えているこの憲法は、いまや日本のものだけではなく世界を守る教えだと考えます。

先きほど読んだ箇所、かつて繁栄を誇ったエルサレム神殿に心奪われることに対して強く警告を発したイエス・キリストの教え、その具体的な教えが私は日本国憲法の前文や9条には宿っていると思うのです。人を守るのは武器ではないのです。イエスの教えは人間愛そのものでした。人間愛と武器は決して歩み寄ることのできない正反対なものなんだということを、私たちは教えられているのではないのでしょうか。

イエス・キリストの愛の教えに生きると告白することは、イエスが十字架によって赦された、まさに全人類すべての人を愛して生きて行きますと告白していることと同じです。そのイエスが語る愛しあう生き方こそ真実の平和への道です。イエスを愛すると言いながら武器を取ることは絶対にあり得ないんだということです。イエスを愛するということは、平和を愛するという事なのですから。

蒲田新生協会牧師

9月30日



竣工直後の内観 1916年（大正5年）

～「旅立ちの時」より

4年間の歩み

《エレミヤ書29章11節》

佐野 聖二

私は両親がクリスチャンだったので小さい頃から教会に通っていましたが、中学・高校の時には遠ざかりました。明治学院に入学後、また教会に通い出しました。ヘボン聖書研究会というサークルに入り、聖書を学び様々な人と出会い、悩みや疑問などを打ち明け、キリスト教について学び、楽しく有意義な学生生活を送りました。一年生の時洗礼を受けてクリスチャンになったことは、一番の喜びでした。聖書に書いてあることや先輩クリスチャンを見て、そのように思いました。

学生生活には満足していましたが、やりたいと思っていたことがありました。外国に行くことです。

外国に行ったことが一度もない私だったので外国への憧れは強いものがありました。特に行きたい国はインドであって、その理由はインドに長い間滞在していた友人がインドは絶対はまると言っていたことです。過酷な地であるけれどその現実から目を背けたくないし、見てみたい気持ちからもインドへの思いはありました。

そしてもうひとつはボランティアです。人のために無償で働くということはどんな気持ちなのか、自己満足で終わることはないだろうかと自分の思いを試してみたい気持ちもあったし、また人のために働いてみたいという思いもあり、それは聖書では「人に仕えよ、隣人を愛せよ」と書いてあること、また明治学院が掲げている「Do For Others」の理念に後押しされていました。

そんな時に「ハビタットフォーヒューマニティ」というキリスト教精神に基づいて活動する国際的な NGO のサークルが主催した「インドに家を建てにいこう」というプロジェクトがありました。

自分が行きたい国へ行ける、ボランティアができることと同時にそんな機会が訪れて、この機会を逃すまいと行くことに決めました。

炎天下の中の家作りはとても大変でしたが、現地の人たちと協力して家を建て、チャイをご馳走になり、言葉は通じないのに遊んだり分かち合ったりと

五日間の短いワークであったけど、とても仲良くなれました。

最後のお別れの時はとても悲しかったし、またいつかここに来たいと思っていました。メンバーとの結末はこのプロジェクトを通して強くなることは自然ですが、インドの人とこのような気持ちになれて人種は違うけれども人として繋がっているのだと感じた時でした。インドの現状を実際見て聞いて体験してとカルチャーショックは多くあって、学んだことも多くあり、自分が日本に帰ってから何ができるのかと真剣に考えた時でありました。この経験は私の視野を広げて、世界に目が向けられました。そして四年生が始まり、ここでも無知である自分にとって必要な働き場所が与えられました。

この四年間を振り返ってみてよく言われる言葉に、四年間は短かったということがあります。確かに短いと感じるけれどもとても長かったと感じるほうが強いです。毎日が充実していました。もしもう一年間大学生活を送ってもいいと言われてももういらぬなという気持ちになるでしょう。それほど濃い四年間でした。勿論やり残したこと、後悔したことは多々あるけれどそれ以上に満足したことの方が多かったです。その時々自分に必要な場所や、与えられる仲間、教えられること、学んだこと、また辛いこと、試練、忍耐することによって得られるもの、友達に怒られることにより知ったことなど、必要に応じて神様はそれぞれを与えてくださったのだと思います。

神様に会って、クリスチャンとなれた事が明治学院に来て一番の喜びであったと最初に述べたけど、その神様が与えてくれた仲間がいたことによって私の大学生活は貴重な時となりました。明治学院に入学しなければ会うことはなかった人がいるのだということを考えると、それはとても辛いことで明治学院に入れてとても感謝しています。

神様は私の人生を計画してくれて、必ず良い方向に進ませて下さるお方だと知りました。卒業後に自分がどんな人生を歩んでいくのかは分からないし、不安もあるけどもすべてを知っていてくれて、一緒に歩んで行ける神様に委ねて生きたいです。

最後にクリスチャンである私の友人がくれた聖書の言葉をお読みします。

「友はいずれの時にも愛する、兄弟は悩みのときのために生まれる」

箴言17章17節

英文学科4年

1月11日

～「大学とキリスト教」より

智の共同体

《マタイによる福音書 4章18～22節》

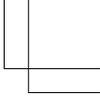
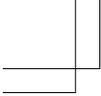
鍛冶 智也

本日のテキストは、「人間をとる漁師」などと要約された箇所ですが、並行記事であるルカによる福音書第5章1節～11節によれば、もう少しこと詳しく記されています。イエスの弟子となるペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネが、通りすがりの「お兄ちゃん」から「先生」「主」と呼ばれるようになるだけの、びっくりするようなことをイエスがしたために、感動してついていったということがわかります。しかし、それでも私には4人の態度は、軽率愚かに思えます。いくら驚くべきことをしでかした人物、自分たちの親よりも能力があると考えられた人物であったとしても、それだけであとさきも考えずについていくのは、いただけません。

けれども、こうした一連の出来事を別の角度からながめてみると、非常に興味深い視野が開けてきます。2組の兄弟は、それぞれの親たちと共に漁をし、そこそこの幸せ、安定した生活を送っていたに違いありません。それが「出会い」の結果親や故郷、これまでの生活を捨てるほどの経験をする事となるのです。こうして、寝食を共にする「共同体」ができあがります。

一説にペテロら4人の年齢は、10代前半といわれますが、平均寿命や社会的意味を考えると、現代においては20歳前後であると思われます。非常に感受性が敏感になり、これまでの知識や経験を、自己表現として行動していく時期でもあります。このキャンパスに集う皆さんのような学生の時期にあたるかと考えてもいいのではないのでしょうか。

実は、イエスについていった彼らの軽率さを批判できるほど、私も自分の将来に全面的な予防線を張っていたわけではありませんでした。大学時代においては、私の人生を決定的に方向づけてしまう「出会い」を経験し、ついていった結果、現在の自分があるという事実に気づかされるのです。私が教員としてここに立ってお話しているのも、大学において学問との出会いに先立って恩

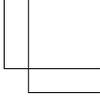
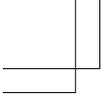


師との出会いがあり、その結果現在の職に就いているからです。また、イエス・キリストとの出会いも大学時代でした。いま、教壇ではなく、チャペルの説教台でお話しているだけは、ペテロたちと同様にイエスとの「出会い」の結果なのです。結果というよりも、これはいまなお続く継続的な課題でもあります。

さて、大学というところは一体どういうところなのでしょう。受験から開放されて、社会の枠にはめられてしまうまで青春を謳歌するところ。数年後に何をしようかと思案しつつ、モラトリアムするところ。なにはともあれ学士免状をもらうところ。第一には、大学とは学問をするところですか。では、なぜ学問をする場として大学があるのでしょうか。キャンパスに毎日のように通うことが必要なのでしょうか。キャンパスの中心にこんなチャペルが必要なのでしょうか。学問するには対象にいささかの関心と数冊の本があれば、始められるのではないのでしょうか。IT化の時代なのだから、サイバーキャンパスで好きな時にコンピューターの画面で勉強することも考えられます。いや、実はそうではないのです。もし、そうであれば大学など必要ないのです。

大学とは一緒に行く「共同体的営み」を大切にしているところなのです。教師は何が真実か、善なるものか、美的であるかを文字や音声で伝えるだけではなく、学生自身がいったいどのように「真実なるもの」、「善きもの」、「美しいもの」と出会っているかを、一緒に経験する場でもあるのです。各人が個の殻に閉じこもり、自らを開放せず、「共にすること」を求めず、大きく変わることに臆病になっていては、意味は失われてしまうでしょう。

人との出会いだけが、「共同体的営み」ではありません。教室で学習されるもの、研究室で研究すること、図書館に備えられているものは「価値のあるもの」と認められたものです。過去のものが教えられ、学ばれ蓄えられているのです。こうした過去のものが現在の課題と組み合わせられ、将来の問題として認識された時に現在と未来を「共にする」ことができます。大学は未来との出会いの窓口でもあるのです。イエスが弟子たちと出会った時のように、教師は真剣に日々の営みを行い、学生は教師や友人との共同を求めなければならないのです。大学コミュニティにいる者たちは、皆日々直面する課題や問題と真剣



に取り組み、自らを「新たなもの」として受け入れ、求めていくことが期待されているのです。

大学は、「智の共同体」といわれます。そこに集う人々が、互いに挑戦し、時には対立し、そして和解することで人生の一大転機となるその「共同体への参加」がもたらされるのです。チャペルが大学の中心にあるのは、「智の共同体」にとってたいへんに重要なことです。なぜでしょうか。人が神と出会った時、神は二種の現れ方をしました。ひとつは、人に神が乗り移る現われ方です。別の言い方では、人が自分を神だと感じる現れ方です。その時、森羅万象は自分を中心に廻り、自分の尺度が世界の標準になります。客観性や批判的精神、熟慮や討議などは、必要なくなります。しかし、キリスト教の神はこのように人と神が出会うことをよしとしていません。

もう一つの出会いとは、神が常に変わらずどっしりかまえていて私たちを見、人が神から「あなた」「おまえ」と呼ばれる相対的・客観的な存在になる出会いです。人が神を定義するのではなく、神が人を定義するのです。自分も他の人々・モノも、常に同じく神に「見られている」存在として認識されています。すると、自分自身をも客観的な存在として捉えることができ、自分に偏りがあり、一部しか見ていないということが自覚されます。自らの主観に、疑いを持ち、批判的に見るということです。これがないと学問は成立しません。

それ故に神を礼拝するチャペルが大学の中心にあり、すべてを相対的に位置づけることが大学にとって重要なことなのです。

法学部教授

4月21日

～「学生クリスチャンウィーク」より

一粒のチョコレート

《マタイによる福音書25章31-46節》

坂口 緑

流行にとびつくくせのある私は、ここ数年、ちょっとしたブームになっている高級な「ショコラ」を銀座や六本木に友人とでかけて買い求めることを楽しみにしていた。けれども一冊の本を読んで衝撃を受け、それ以来、買い物のスタイルを本気で考え直すようになった。『子どもたちのアフリカ』（石弘之岩波書店 2005年）という本に書かれていたのは、先進国で消費されるチョコレートの多くが、奴隷として働かされている子どもたちの血と涙でできているという事実だったからである。

現在、世界のカカオ豆のほぼ100%が途上国で生産されている。その七割をコートジボワール、ガーナ、ナイジェリアなどの西アフリカの国々を占めている。なかでもコートジボワールは世界の40%以上のカカオ豆を生産していて、大規模なカカオ農園をかかえている。ユニセフや米国国務省の報告によると、カカオ農園で「奴隷」として働く子どもは15000人をくだらないという。

子ども奴隷は、さらわれたりだまされたりして、マリ、ブルキナファソ、トーゴといった近隣諸国から連れてこられる。奴隷商人たちは集めた自国の子どもたちを、他国の子どもとわざわざ交換する。言語や生活習慣、土地勘のない場所に移動させ、逃亡を防ぐためである。女の子はセックスワーカーとして転売され、男の子は農園に連れてこられる。ユニセフは2002年、コートジボワールのカカオ農園で働く9歳から12歳の子ども奴隷に聞き取り調査をしている。中には6歳、7歳の子もいたという。カカオ農園で働く子どもたちは豆を収穫して実を切り開き、中身を取り出す作業をさせられる。カカオ豆が詰まった自分の背丈より大きな袋をかつぎ、棒で殴られ続けて急いで運ぶ。防護マスクも手袋もなしに、危険な農薬を散布する。十分な食事を与えられることはない。夜は狭い小屋の板張りの床にすし詰めになって寝る。外からは鍵がかけられ、排便は缶の中にしなければならない。給料はもちろんなし、学校にもいかせてもらえない。重労働や病気で死んでいく仲間を毎日、

見て過ごす。逃亡して捕まると死ぬ寸前まで殴られる。

カカオ農園で子ども奴隷が使用される理由は、この10数年間のあいだに、カカオ豆の価格が1977年頃の最高値時の5分の1にまで暴落したからだという。価格暴落の背景にあるのは、対外債務返済を名目とした世界各地でのカカオ生産の増大による供給過剰である。1960年代から70年代におこなった道路や港湾、空港やプランテーション開発などインフラ整備の債務と利子の返還に苦しんでいる途上国は、しかたなくIMFに「救済融資」を申し出る。すると融資の条件の一つとして、カカオ豆など特定の換金可能な商品作物の単一栽培を提示される。輸出して換金し債務の返還にあてるためである。西アフリカや中南米で次々とカカオ豆の生産に乗り出す国が増え、その結果、価格が暴落。西アフリカの農園では生産コスト削減のために、奴隷商人を介して手に入れる子どもたちをただ働きさせなければならない状況に追い込まれている。

もちろんチョコレートだけではない。コーヒーもバナナもコットン製品も、途上国で生産される多くの換金作物が、大きな犠牲の上に生産され消費されている。難しいのは、チョコレートやコーヒーを消費しなければいいのかということとも言えないところである。消費量が減るとそれだけ価値も下落し、生産サイドのコスト管理はますます強まる。とりあえずの選択肢、それは別天地で理想的に作られる「フェアトレード商品」を買うという消費行動なのかもしれない。ただ同時に知っておかなくてはならないのは、この消費行動がコートジボワールで働く9歳の少年の救出につながるまでには、途方もない手続きが必要になるという事実だろう。

何が「正しい」行動なのかがわからない、このチョコレートに象徴されるような問題を前に、私たちにはおそらく2つの方法しか残されていない。問題などなかったのだと忘れてしまうのか、それとも忘れないでいるのかの2つである。忘れたふりをしないように、忘れてしまわないために何ができるのだろうか。簡単に答えは出ないのかもしれない。けれどもチョコレートやコーヒーやバナナやコットン製品を買おうと手を伸ばすとき、もやもやした問題意識とともに、次に何ができるのかをいつも考えたいと思っている。

社会学部助教授

7月1日

私が救われた訳

《箴言3章5節》

渡辺 彬彦

私が教会に行き始めたのは小学校2年生の時でした。それまでキリスト教に接点があったのは、高校がミッション系だった母だけでした。実家は仏壇や神棚のある、当時としても典型的な日本人の家庭でした。そんな家庭で生まれ育った私が、なぜ今クリスチャンとして生きているのか、お話したいと思いません。

私は生まれたときから祖父母の元で暮らしていたため、毎日仏壇に供え物をし拝んでいました。しかし、子どもに宗教という枠組みなど分からず、この世界には何か拝むべき存在がいるという概念が、私の中に刻まれました。このことを通して、私はキリスト教を何の抵抗もなく受け入れ、教会に行き続けました。

学校に通い知識を得る傍ら、教会に通い知恵を得た私は、その中で進化論や罪に対する姿勢といった多くの矛盾と出会いました。私の近くにクリスチャンの友人はいなかったので、誤った流れに流されることもしばしばありました。しかし、父の仕事の都合で香港へ移り住んだ時、1人のクリスチャンと出会い、その流れに逆らい始めることが出来ました。教会の集まりと友人達の集まりの日にちが重なった時など、教会を優先させることが出来ました。

神様から多くの恵みをもたらしているにも関わらず、神様と一定以上の距離を保とうとしている自分がいました。中学生や高校生の時には、洗礼の話を持ち掛けられても、うやむやにしていまい、後回しにしていました。高校に入ってから、教会から離れ始め、礼拝に出席しない時もありました。高校二年生の三月、迷った末教会のキャンプに参加することを決意しました。そのキャンプの講師がメッセージにより、自分の罪を思い知らされたら洗礼を受けようと決心しました。私は罪の意識というものに鈍感なところがありましたので、キャンプが終わってから、自分が打ち碎かれるよう祈りました。

その時は何も変わっていないと思っていましたが、今では気付かない内に

変えられていたように思われます。このキャンプを終えてから、自分が犯した罪に対し悔い改めるようになっていました。

そしてその年の夏キャンプにも参加しました。私はこのキャンプに特別大きな期待を持ってはいませんでした。しかし神様は、そんな私を良い意味で裏切ってくださいました。講師の先生が、洗礼を受けたいと思っている高校生は手を挙げてください、と言われた時、私は衝動的に手を挙げました。今ここで手を挙げなければ、次にいつこうして決意できるか分からない、という思いが頭の中を過りました。その後、スタッフと分かち合いをして、自分の心が頑なであったことを告白しました。小学生の時のキャンプでも、イエス様を受け入れましたが、それは頭の中だけのことでした。その時は罪のことなど真剣に考えてはいませんでした。今、私はイエス様の十字架の意味や罪を考え、自分一人ではどうしようもないことを知りました。そして、私は洗礼を受けることを決意しました。

私の教会に来始めてからの生活の中で、受洗までの道のりは緩やかな坂道を上るようでした。しかし、それこそが神様が用意しておられた道なのでした。私は家族の中で最後に受洗しましたし、周りでも小学生の頃に受洗した人などいましたが、それでも神様は私から目を離さずにご案内してくださいました。そして、この場では挙げることはしませんが、今まで歩んできた人生の中で、神様は多くの御業を行なわれました。神様が、ただ世界を傍観しているだけの存在ならば、私はクリスチャンにはならなかったでしょう。しかし、神様はご自分がいらっしゃることを人々に教えてくださっています。その経験があるからこそ、私は神様に従って生きていこうと思うのです。自分をどんなに小さい人間だと思っても、神様にとってその人は掛け替えのないたったひとりの大切な存在なのです。そのことは聖書にもはっきり書かれています。そんな神様のことばである聖書が今ここにあります。この聖書にぜひ触れ、よりキリスト教のことを知っていただきたいと思います。

英文学科3年

10月5日

～「近隣牧師からのメッセージ」より

人生に使命はあるのか

《使徒言行録16章29 - 31》

長津 栄

あなたをご両親に「なぜ私を産んだのか」とたずねたことがありますか。あなたのご両親はあなたにどのように応えるでしょうか。その問いを、キリスト教では「神はなぜ、人をお造りになられたのか」という問いに置き換えることができます。それに対する聖書全体からの応えは、「愛するために、神は人を創造した」という答になるでしょう。

それで、あなたにおたずねします。あなたは「家庭に使命があると思っていますか」

昨年春、10人の女子高校生と2泊して話し合いの会を持ちました。その会はそれぞれが自分の課題を持ち寄って発表し、それに基づいて討論する会です。僕は「家庭の使命」という題で発題しました。僕は少年院で犯罪少年と面接して40年程になりますが、年々家庭力が低下していることを痛感しているのです。そのような角度から「家庭の使命」という題で話をしました。そうしたら、全員が僕の考えに反対でした。「親は子供に思想とか信仰を押しつけるべきものではなく、互いに愛情を育み合う所が家庭である」というのです。あなたはどのようにお考えでしょうか。

もうひとつ。私が牧師をしている教会では、結婚式を一般の方々に開放しています。ただし、「結婚するにあたって」というレポートを書いて頂いています。ほとんどの人が、結婚に至る経過はいきいきと書いているのですが、結婚する理由となると、筆がにぶるのです。今までは女性が結婚する理由に悩んでいたのが、最近では男性でも結婚する理由をあぐねているケースが多いのです。女性は「この人とだったら『私がわたしでいられる』から」という応えが多く、男性は「趣味や価値観が同じで、共にいることが楽しいから」という応えが多いようです。「二人で何かを一緒にやろう」という志や使命、あるいは共通の課題に基づいた結婚はほとんどありません。

聖書のなかに牢獄の看守が、キリスト教徒の伝道者に「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」とたずねている記事があります。それは、地震で牢屋が壊れたのに、キリスト教伝道者が逃げず、彼らの祈りや賛美の歌に耳を傾けていた囚人たちも逃げなかったことに驚いて、思わずたずねた言葉です。ここで言う救いとは「死んだら、天国に行ける」という救いや、上司から看守が裁かれない救いではないのです。「救われた生き方をするにはどうしたら良いか」という問です。その「救い」は人生における「ありかた、即ち d o ではなく b e」が問われているのです。

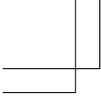
クラーク博士が言った「ボーイズ ビー アンビシャス」は、その言葉の後に続く「金や名声のためにアンビションを持つと言うのではない。そうではなくて『人間として当然あるべき(a man ought to be)こと』に対して大志を持つ」と語っているのを見れば明白です。クラークの弟子の新渡戸稲造は「人は何になるか、何をするか(d o)は大したことではない。どうある(b e)かである」と記していますが、教師になるか皿洗いになるかは人生の大事ではないのです。

看守に応えた伝道者の答は「主、イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」と言う言葉です。主イエスを信じるとは「神が私を、どんな私であろうとも、愛しているということを受け入れることです。それを受け入れた時、隣人を愛する者へと私が変わられるのです。愛ある存在へと変えられて生きることが救いなのです。それは価値観の転換を意味することでしょう。信仰とはあり方(b e)の問題なのです。

人生には、使命や課題が必要です。家庭にも使命や課題が必要です。使命のない人生、課題を自覚しない家庭は我欲に流されながら不満がたまります。その使命や課題は家を建てるために財産を貯めるとか、同じボランティアに参加するとかいうことを意味していません。「自分と隣人、世界を愛するという課題や使命」をもって生きることです。聖書を読んで自分に与えられている使命や課題を発見していただければ嬉しいです(看守と伝道者との対話の記事は使徒言行録 16 章 16 節以下にあります)

高輪教会牧師

11月7日



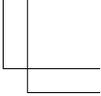
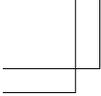
Who Is Jesus?

《Isaiah 9 : 2、Gospel of John 8:1 2》

Christian Zebley

Good Afternoon. The title of my message today is “Who Is Jesus?” As you know Meiji Gakuin University is a Christian-related institution. On most days you probably pass by Hepburn Chapel on your way to class. If you attend a chapel service, you can hear readings from the Bible, listen to organ music and sing hymns. During the Christmas Season, a candlelight service is held in Hepburn Chapel and first-year students are required to take an “Introduction to Christianity” course. Perhaps, you have already learned about Dr. James Hepburn, Rev. Samuel Brown and Dr. Guido Verbeck who were Christian missionaries in the Meiji period and the founders of this university. These are just a few of the ways you may encounter Christianity at Meiji Gakuin. The word “Christianity” simply describes the religion of those who have chosen to follow Jesus Christ. Thus, to really understand Christianity, we need to know answer this question: “Who Is Jesus?”

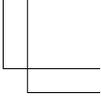
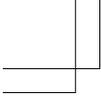
First, there are some basic facts about Jesus. Jesus was a real, historical person born over two thousand years ago in the city of Bethlehem in Palestine. He was a Jewish carpenter who later became a popular teacher with many disciples. When he was 33 years old, he was crucified by the Roman authorities in Jerusalem. His disciples believed he was the Son of God who rose from the dead three days after dying on the Cross. After his death his followers spread the “Good News” of his resurrection throughout the world. The New Testament of the Bible is primarily about the life of Jesus and the work of his disciples. Thus, history is one way we can try to answer the question: “Who Is Jesus?”



Another way to answer this question is to look at the statements Jesus made about himself. In John 8:12, we read, **“I am the light of the world. Whoever follows me will never walk in darkness, but will have the light of life.”** This is a very powerful statement to make about yourself. Actually, Jesus made other unbelievable statements such as “I am the bread of life,” (John 6:35) and “I am the way, the truth and the life.” (John 14:6) When Jesus said these things, many people thought he was strange or just trying to gain public attention. On the other hand, Christians believe Jesus made these statements to communicate his true identity as the Son of God.

Why did Jesus say, “I am the light of the world.” ? What does this statement really mean? I find it interesting how people are attracted to light. When the sun rises in the morning, people take morning walks to enjoy the sunlight. I live in Kamakura in Kanagawa Prefecture. Yesterday, my family and I took a walk along the beach to Inamuragasaki Koen, a famous place where you can see Enoshima and Mt. Fuji on a clear day. As darkness began to fall, many people gathered in the park to watch the sunset. Obviously, light is very important to human beings. We really cannot live without it. In the same way, Jesus said, “I am the light of the world.” Perhaps, Jesus used this statement to emphasize that He is essential for living.

Have you ever driven a car at night? If so, you understand that headlights are essential for safe night driving. Without the illumination of headlights, you would most likely have a car accident. In the same way, the teachings of Jesus can be our headlights as we live in a world of darkness. In this sense “darkness” is the reality of suffering often caused by greed, ignorance and hatred.



The teachings of Jesus can be summarized in two important Bible verses. In the Gospel of Matthew 22:37-38, Jesus said, “ ‘Love the Lord your God with all your heart and with all your soul and with all your mind.’ This is the first and greatest commandment. And the second is like it: ‘Love your neighbor as yourself.’ ” Jesus is the “light of the world” because he transforms human beings with love and truth. If we follow Him by loving God and our neighbors, our lives will shine with the light of Jesus as we make the world a better place.

This year, “Do For Others” is the slogan of Meiji Gakuin University. This slogan is taken directly from Jesus` commandment to love our neighbors as ourselves in Matthew 22:38. In this way our university is guided by the teachings of Jesus. During your time at Meiji Gakuin, I pray you will learn more about Jesus and allow him to become your guiding light.

まとめ：

今日のメッセージの題名は“イエスはだれですか”です。キリスト教と言うのはイエスに従う人の宗教です。ですから、イエスは“だれであるか”と言う質問に答えなければなりません。歴史によるとイエスは本当にこの世に生きていました。ですから歴史はイエスが“だれであるか”と言う質問に答える一つの方法です。もう一つの方法はイエスをご自分について言われたことを見ることです。例えば今日の新約聖書の箇所ヨハネによる福音書8章12節に“わたしは世の光である。”と書いてあります。これ以外にもイエスが色々な信じがたいことをご自分について言われました。

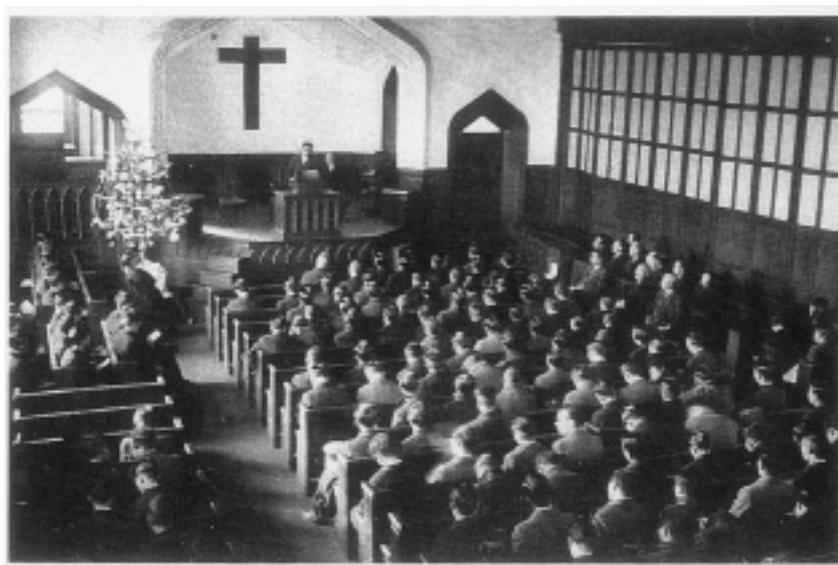
人間にとって光はとても大切です。たとえば昨日私と家族は鎌倉の稲村ヶ崎公園から江ノ島と富士山を見ていました。他にも沢山の人が同じように日の入りを見に来ていました。また夜車を運転している時にはヘッドライトが必要です。イエスが言われた神と隣人を愛すると言うみ言葉は私達の人生のヘッド

ライトであります。

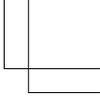
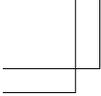
今年、明治学院大学は、“Do For Others”（隣人のために働こう）というスローガンをたてました。このスローガンはまさに神様のみ言葉である”隣人を愛しなさい”に基づいたものです。このスローガンが私達の新しい一年のヘッドライトです。私はイエスの光が皆様を照らしその光が皆様を導いて下さる一年でありますようにお祈り致します。

協力宣教師

10月25日



講演風景（戦前）



Just Say Yes

《Scripture: Matthew 6: 25-29》

Makim, Joseph T

In English there is the expression “worry wart.” Probably most of you don't know this expression: worry wart. A worry wart is a person who worries about things all the time. You probably know such a person, or maybe you *are* such a person.

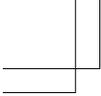
I have been a worry wart most of my life. If you know me, you might be surprised to hear that. I try not to talk about my worries. I try to hide that part of my character. And I think I am successful in hiding it most of the time. However, I really did use to worry--about everything, all the time.

My worries were such things as, “Oh, maybe I will lose my job for some reason, and can't find a new job.” Or, “Maybe something terrible will happen to Meigaku, and *all* of us will lose our jobs.” Or, “Maybe I'll make a foolish investment with my money and lose most of it.” Or, “Maybe somebody will steal my credit card number and use it to buy many things.” Or, “Maybe I have some terrible disease. Even though I don't feel sick, maybe some disease is growing silently inside my body.”

In fact, about five years ago I began to see a doctor and get medicine for my problem of worrying. I began to take a few pills every day. One pill was to relax me when I feel worried or panicked. Another pill was to let me sleep at night.

About a year ago, however, my attitude began to change. At that time, I had to make a very important decision about my future. I wish that I could tell you the details of that decision, but I can't. It's a very personal matter.

I can say only this. I have always had a dream. There is something



that I have always wanted to do. I have had this dream from my high school days and I was never able to reach it, because I was too afraid, too frightened, too worried. It is a very, very difficult dream to make come true. But finally, last year, I had a chance to make it come true. At that time I faced a decision of “Yes” or “No.”

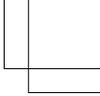
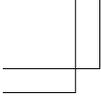
If I chose “Yes,” I could follow my dream. *But* I would gamble with everything important in my life: my job as a teacher in Meigaku, my relationships with my friends and colleagues, and even my family. All of these things *might* be damaged if I chose “Yes.” But if I chose “Yes,” I might get a new life and a better life. I might be able to spend my days--every day--doing a thing that I enjoy doing. All of these things were “might be” or “may be.” Nobody could know for sure.

On the other hand, if I chose “No,” then nothing in my life would change. Almost 100 percent for sure, I could continue with my job as a teacher in Meigaku, and continue my comfortable relationships with friends and family--and I could continue worrying about my life all the time, too.

In the end, I chose “Yes.”

Almost one year has passed since I made that choice. So far, nothing very bad has happened, and nothing really great has happened. Sometimes I regret that I chose “Yes,” but most of the time I am glad. Gradually, I begin to feel free. I come to stop worrying so much about the future. Yes, it's still true that I might lose everything that is important to me, but if so, I can still find a happy life, and I no longer live in fear. And I stopped taking the pills.

Everyone has to make choices in life similar to the choice that I made. Many of you Meigaku students make a big choice when you become seniors. You probably also have some dream to be a professional musician or actor or writer, something like that. So, do you try to take that road? Or do you take the *safe* road, doing “job-hunting” activities and joining a big company? Do you take a gamble that might make you very poor and might



make your parents angry? Or do you take the safe road, and get enough money, and make *other* people happy? Do you say “Yes” to your dream? Or “No” ?

As for me, my life is more than half over now. I spent most of my adult life working as a teacher in Japan, doing things that perhaps made other people happy, and maybe earning a good salary. But I also spent most of my life *not* doing what I really wanted to do. I spent most of my adult life always feeling uncomfortable, always feeling that I don't belong in this place, always being afraid of what *might* happen. You know, the Bible tells us that we should try to be good people and not hurt others. Many people think that it means that we should do what our parents or bosses or other people want us to do. We should sacrifice ourselves. I don't think so. The Bible tells me that my life is a gift from God. If I waste my life doing things that other people want me to do, it is an insult to God. I believe that God wants all of us to make our lives as interesting and exciting as possible. We should make the most of the gift of life.

Everyone, you can't change what has happened. The past is the past. But you can absolutely choose to do what you want to do in the future. Please, please don't be like me. Don't live most of your life to please other people. Don't live your life feeling frightened all the time. Say “Yes” now, and keep saying it, every day. When you face a choice that seems risky or dangerous but also has great possibilities for your dream, always say “Yes.”

教養教育センター専任講師

10月3日

聴く力

《ルカによる福音書 5章1～11節》

土屋 博嗣

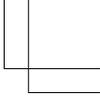
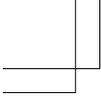
この箇所は、イエスによって4人の弟子が召された場面です。中心になっている人物は、漁師であるシモン・ペトロです。イエスは、漁師の舟を借りて、湖に浮かべて小舟の上から岸辺にいる群衆にお話になりました。話し終えてから、船を借りた漁師のペトロに、沖に行って網をおろしなさいと言います。ペトロは、漁師として働いていた人ですから、もうすでに夜通し働いて何も取れなかったことを言いますが、先生のお言葉ですからということで、網をおろします。そしたら、二艘の船に一杯になるほどの魚が捕れたということです。

ペトロは、漁師として働いていた人ですから、この漁場もよく分かっているはずですが。漁師としての判断に自信と誇りを持っていたと思います。それで今まで生活を支えてきたのですから。それなのに、ある意味で漁をあまり知らないと思われるイエスの言葉を聞き入れ、「お言葉ですから」とその指示に従いました。その結果、望外の成果を得ることができました。

私たちに、何事もうまく運ばない、不遇のときがあります。例えば、試験や試合で思うように実力を発揮できなかつたり、計画が思うように運ばず、落ち込んでいたりするときです。アルバイト先で上司に仕事のことで叱責されて、自分にすっかり自信をなくしてしまったりしたときがあるかもしれません。

そんなとき、私たちはしばしば努力することによって問題を解決しようとします。足りないところを補うように頑張ってみます。例えば、試合に負けたのなら、練習時間を増やすことによって、技を磨こうとします。動き回ることによって何とか脱出口を見つけ出そうとします。その動きが正しい方向を向いているなら、たぶんそれは有効な手段だと思います。スポーツや勉強や仕事など、やるべきことがはっきりしていることなら、正しい方法だと思います。

しかし、人生には、何が有効であるか、何が正しい方向であるかが分からないことも少なくありません。大学の卒業間近になると、社会人として何を仕事にしてどうやって生きていったらいいだろうか。家族や友人との関係がぎく



しゃくしてしまい、どうやって修復していったらいいのだろうか。何を目標にしたらいいのか、何となくだらけてしまっている自分がいて、そんな状況を変えてみたい。そんなとき、この話が参考になるのではないのでしょうか。

現代社会が失ってしまったものの一つに、闇と沈黙があるということを知ったことがあります。24 時間営業のコンビニは、夜の世界を昼間のように照らしています。あの明るさは、闇の中に存在する不安を振り払うかのようです。また、沈黙では、少し前までは、歩いているときや乗り物に乗っているときは、静かに物事を考えることができる時間でした。目的地に到着した後の予定を考えたり、一日を振り返って反省をしたこともあったと思います。十年後の自分をふっと考えてみたりする時間でもありました。しかし、現在は、好きな音楽を聴いたり、友達をケータイでメールのやりとりをしたりしています。私たちは、今の時間の中で流されていくだけで、じっくり考える時間すら与えられていません。毎日起こる日常の些事に翻弄されている自分がいるだけです。現代社会は、人間のその悩み苦しみを紛らわせるために、闇と沈黙をなくしているかのようです。一時的な気紛らわしで自分の悩みや苦しみを忘れようとしているかのようです。

今、些事に翻弄され絶えず動いている、自分のやり方や考えを一時横に置いて、イエス様の言葉に耳を傾けてみる。その言葉に従って見たとき、自分一人では考えられなかった方向が示されるかもしれません。中国の古い言葉に、「四路五動」という言葉があります。私たちの前に東西南北に行く路が4つあったとしても、そのとき取り得る行動には5つあるということです。4つの路を選んで進むことのほかに、あと一つそこに留まるという行動があるということを表した言葉です。動かずに、じっと静かに心の奥底に降りていって、イエス様が語りかけてくださる言葉に耳を傾けたとき、私たちが取るべき次の行動を教えてくださいませんか。忙しく動き回るだけではなく、ゆっくり自分の心に聞いてみる時間を大切にしたいものです。

国際学部教授

10月6日

存在意義

《マタイによる福音書6章：25 - 34節》

稲垣 光児

私は高校2年の時に洗礼を受け今は毎週日曜には教会に通っています。

今日、ここで何を話そうかととても悩みました。それは私自身今思い悩んでいることが多いからです。キリスト者にとって、思い悩む、というのは信仰がしっかりしていないということだと私は思っています。なぜなら、すべてを神にゆだねることができたなら何も思い悩む必要はないからです。そんなキリスト者としてあまいな自分がここで話をしてもよいのだろうか、と思ったのです。しかし、せっかくこの場が与えられたわけですし、その私が今現在思い悩んでいることをここでお話しすることに何か意味があるのでは、と思い今日この場に立たせてもらっています。取り留めのない話ですが聞いてください。

私が最近思い悩んでいること、それは自分の存在意義です。私は現在4年で来年大学を卒業する予定です。ということでそろそろ卒業後の進路決定をしなければならぬのですが自分が何をしたいのか、自分に何ができるのかということも分からずだらだらと時間が過ぎていってしまいます。少し前までは神様が道を用意してくれるから、と気楽に考えていました。一応就職活動もしていますし、そのほかの可能性も探しています。しかし、なかなか思うようにならず、自分は人から本当に必要とされているのだろうか、この社会の中で必要とされているのだろうか、ということを考えて落ち込むようになりました。キリスト教的には神様は自分のことを必要としてくれている、とか、神様が自分を愛しているから、ということで自分のアイデンティティ、存在意義を確認することもあるのだと思いますが、私はそのようなことだけで心の不安はなくなりません。それだけでは満たされないので。なぜなら、私たちは人間の社会の中で生きていかなければなりません。もちろん私はキリスト者として神様からの愛を感じていますが、私たちは社会の中で必要とされ、居場所を見つけることによって自らのアイデンティティ、存在意義を感じることができるのだと思います。例えば私たちは明治学院の覚醒として日本社会の中で存在が確立さ

れているわけです。存在が確立されることによって人は安心感を抱くことができ、平安な生活を送ることができます。

なぜ、私は素直に社会に出て行こうと思わないのか、私はこれから本格的に突入する日本社会に対して希望を見出せていないのではないかと思います。

私の通っている教会での先日の説教を抜粋したものをお読みしたいと思います。

『今日の我々の住む世界は、「神抜き」の世界とは言えないだろうか。現代人は、合理主義の精神に基いて、客観的に認識できるものだけを受け入れ、そうでない自分たちの理解を超えたものは排除し、そうやって、まるで世界のすべてを掌握しているようなつもりになって、「我々は神抜きで生きることができる」「我々は神の領域に近づきつつある」等と自らを誇っていたりする。機能的であったり、効率的であったり、より役に立つものを価値あるものとし、また、そのような物質主義的な価値観によって人間の価値をはかろうとする（その結果、追い立てられ、自己の価値を喪失しかける者も多い）。難しい病気が治れば、「あそこの医者は名医だ」「今時の医学はすごい」等と言って、神に感謝し、神をほめたたえるよりも、医師の腕、医学の進歩をほめたたえようとする。このような中であって、我々は、空の鳥、野の花を見ながら、何を思うのか？合理主義、物質主義の支配的な現代社会にあって、我々は、毎日目に映る風景、出来事を見つめながら何を思うのであろうか？』

私は先ほど神からの愛だけでは満たされない、社会から存在を認められない、という風に言いました。要するに神様から確認する自己と「神抜き」社会から確認する自己を求めている、ということです。しかし、これは神と社会とを断絶した考えかただと思います。この説教を聴いて私は、私たちが本来住むべき社会というのは「神有り」の社会なのではないか、と思いました。この「神」というのは何もキリスト教の神だけとは思っていません。もっとキリスト教でない人も感じられる「神」、例えば日本の八百万の神というのがありますが、自然を愛し敬う心とか、人を大事にする考えとか、そういうあたりまえのことをもっと重んじる社会を私は求めているのではないかと思います。

稼げれば良い、自分と自分の家族だけが良ければ良いとか、合理的なものだけが重要で、人が本来の人として見られない社会を望む人はあまりいないの

ではないでしょうか。なぜならそんな社会には魅力がないからです。しかし、今の日本社会はそんな魅力のない社会なのではないでしょうか。

とても取り留めのない話で結論というのがはっきりしていないのですが、まだ先は見えていませんが、進路のことも考えつつ、そういった魅力のある社会で生きていくためにはどうしたらよいか、どこに自分の存在意義を見つけられるのかということも考えつつ残るあと半年の学生生活を感謝してすごしたいと思います。

国際学科 4年

7月12日



袖廊増築後の内観（1920年代）

～「一年生に伝えたいこと・先輩からのメッセージ」より

音楽と私とキリスト教

《詩編 33章1-3節》

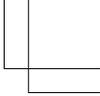
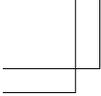
岩崎 春菜

今日の奨励のタイトルのなかで、「私」を音楽とキリスト教の間に置いたことには、私なりの意味づけがあります。それは、私という人間を通して、音楽とキリスト教が出逢い、融合した、ということです。その両者が私のなかで融合したことで、今まで持ち得なかった新たな想いが、私に芽生えました。それは、「人を許し、受け容れる」という想いです。

今日は、音楽を通してキリスト教に触れるなかで、私を感じ取ったこと、そしてキリスト教音楽をともに楽しむ仲間とのかかわりあいのなかで得たことを、私の新入生へ向けてのメッセージとして、お話したいと思います。

幼い頃から歌うことが大好きだった私は、大学に入っても合唱を続けようと思い、入学してすぐに、グリークラブという混声合唱団に入部しました。明治学院がキリスト教を掲げる大学であることなどさして意識せずに入学し、そして入部したグリークラブが、キリスト教の教会音楽を歌う合唱団だとも意識せずに、私の大学生活はスタートしました。しかし今となっては、それが私という人間のなかで、ずっと大好きだった音楽がキリスト教というひとつの教理と出逢い、結びついていく過程の始まりだったのです。

グリークラブは、年に2回の演奏会へ向けて、週3回もの練習をこなし、その他にも合宿や礼拝賛助など、様々な活動を行う部活です。今日の聖書の箇所として選んだ詩編33章の冒頭は、私がグリークラブで行ってきた活動そのものを言い表しているかのような箇所です。「主に従う人よ、主によって喜び歌え」に始まるこの箇所は、大学生活を送る上で、常に私を明るく照らしてくれていた言葉です。私は、主に向かって歌うことによって、「人を許し、受け容れる」ということを学ぶことができたのだと思います。では、私がおしえを、キリスト教音楽を歌うことによって体感し、自分の想いとして持つようになったいきさつを、お話ししましょう。



グリークラブの活動では、歌うこと以外にも、時間を見つけては、活動の方向性や練習計画などの話し合いを繰り返します。そのなかでは、仲間の様々な面を知ることになりました。仲間のいいところだけではなく、もちろん短所と言えるような、自分には受け容れがたい面も見ざるを得ません。そんな一種の葛藤を抱えながら、日々ミサ曲や讃美歌を歌い、歌詞内容を吟味し、礼拝では聖書の言葉や奨励に耳を傾け、キリスト教の主義主張にふれ、考える。そういった時間を、私はいつもグリークラブの仲間とともに過ごしてきました。大学に入るまでキリスト教とは無縁で、しかもプロテスタントの学校だという意識もなく入学した明治学院で、気がつくとい私は、ほとんど毎日キリスト教にふれるようになっていました。

そして日々、様々なおしえにふれるなかで、私にひとつの想いが生まれました。それは、いいところもわるいところも、その全てがその人自身なのだ、という、その人そのものを内包してしまえるほどの大きな気持ちでした。これは、「人を許し、受け容れる」という、私がキリスト教にふれるなかで一番に得たおしえによって生まれたものです。まわりの人間のいいところを見つけてその人を認める。そして受け容れがたい、わるいところもその人の一面だとして受け容れる。

長く時間を共に過ごし、たくさんのお話をすると、相手のいろいろな側面を知るようになります。その人のいいところが見えてくる一方で、わるいところも見えてきます。そうしたときに、わるいところには目をつぶるのではなく、それもじっくり見て受け容れる、そんな懐の深さを持つ。そうすることで、より一層相手との関係を深め、認め合うことができるようになる、ということを学びました。

それまでの私は、相手のわるいところには目をつぶって、極力その部分が前に出てないことを願うしかありませんでした。しかし、キリスト教精神に則った活動を行うグリークラブで日々を過ごすことで、「人を許し、受け容れる」ということを、身をもって感じることができました。長所も短所も全てをひっくるめてその人なのだということが、私のなかで、すっと理解できるようになり、そのおしえを受け容れることが可能となったのです。

大好きなうたをうたうことによって出逢ったキリスト教のおしえは、私に、

仲間との信頼関係を築く上で最も大切なこと、「人を許し、受け容れる」ということを、身をもって感じさせてくれました。大学に入ると、これまで以上にたくさんの人とかかわりあうようになります。そうしたときに、相手の様々な面をこわがらずにどんどん知ってください。相手の全てを許し、受け容れるということを、ぜひ心にとめて、大学生活を過ごしてほしいと思います。

国際学科4年

4月28日



チャペル内のクリスマスツリー

宗教部・宗教センター

横浜宗教部事務室はチャペルの横に、白金宗教部事務室とオルガニストの事務室はチャペルの向かいの記念館1階にあります。学院牧師室はインブリー館2階にあります。いつでもお気軽に起こしてください。

- ★白金宗教部 電話 03-5421-5218 ★横浜宗教部 電話 045-863-2016
★学院牧師 電話 03-5421-5228
★オルガニスト 電話 03-5421-5227

2006年度 明治学院大学 キリスト教活動ハンドブック

編集・制作・発行 2006年4月1日 明治学院大学宗教部

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL: 03-5421-5218 FAX: 03-5421-5459

〒244-8539 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町1518
TEL:045-863-2016 FAX:045-863-2017

表紙デザイン 佐藤 可士和
印刷・製本 瀬味証券印刷(株)